

随筆「音の細道」

「月日は百代の過客にして蘇りし楽曲に往きかふ年もまた旅人なり」
遠大な時の流れを詠む日本人の感性は、その真摯な眼差しに生きている。
遙かなる時空を越えて飛来する数多の音楽とオーディオの古今東西。
オーディオのロマンを売らんとし、音のセールスクラークを生業と
志す者は、自らその感性の研鑽を日々の勉めと諫めたらん事を望む。
されば世界の未知なる音を、己の足で探訪する旅人でありたいと願う。
彼の国からやって来る南蛮渡来の道具を手に異国の人情に思いを馳せよ。

作 川又利明

第 54 話 「Nautilus を目指したスピーカーの進化とは」

プロローグ

今…、静かに日本のオーディオ業界で大変異例とも言える状況が進行しつつある。
かつて日本でハイエンドオーディオ製品を販売するにはどのような手段があっただろうか？
オーディオ専門誌に広告と記事による露出が繰り返され、多数の評論家によるレビューでも
高得点を獲得し、web などでも様々な評価が上げられ、要は知名度を高めるための相当な経費
と時間を消費しながらショップが販売しやすい状態を作り上げていくことが通例だろう。

販売店としては高められた知名度によって商品説明を簡略化してもユーザーは自然に商品
を受け入れ、販売しやすい土壌をメーカーや輸入商社が作っていくという追い風の状態が必要
とされてきたのではないだろうか。マーケティングには当然イメージ作りが大切なのだら
うが、オーディオの場合には外観にも増して音質が商品価値を左右するものだ。その大原則
を忠実にたどりながら、ここに紹介する MOSQUITO NEO は 2004 年 4 月に初めて当フロアで
産声を上げてから通算 12 セット（2005 年 6 月現在）という販売が行われた。

日本で NEO が展示してあるのはここだけ、世界的にもフランスとドイツのショップと合わ
せて三箇所しかない。残念ながらヨーロッパでは販売実績はまだ上がっていないという。

また、昨年 of インターナショナル・オーディオショー開催の時に、ここを訪れた韓国の
ディーラーに私がデモを行ったところ自分の会社で輸入したいということで MOSQUITO に
コンタクトしたようである。

税別価格 405 万円の高級スピーカーにして一年余りの時間で 12 人のオーナーを日本で確保
したということは何を意味するのか。従来のように知名度を高めて販売への道筋を作ってい
くという手段から、完全に実演主義による製品の音質本位による価値観を日本のユーザーも
受け入れ始めたという新しい販売スタイルが生まれてきたのである。マスコミでの露出がな
くとも製品のパフォーマンスが日本人を納得させ感動させた、この一年余りのエピソードを
ここで一括りしておこうと思いついたのである。

MOSQUITO の音響エンジニアのトップ Philippe PENNA 氏の目標は B&W のオリジナル Nautilus
であったと公言しておられた。その NEO の内容がどのようなアイデアと技術によって設計さ
れたのか。それを体験した私と多数のユーザーにとって、NEO のすべてを包括的に語る時
がとうとう訪れたのである。

第一部「日本ではまったく無名であった MOSQUITO とは」

1993 年南仏プロヴァンス地方に属するマルセイユに誕生したハイテク企業の一つが MOSQUITO である。2,600 年前にフォセアエ人によって築かれた古くからの大港湾都市マルセイユだが、現在では航空宇宙産業、エレクトロニクス各種産業などの研究センターが集結し風光明媚な風景の中に一大工業都市として発展を続けていると言う。

MOSQUITO は音響、デザイン、電子工学、流体力学、素材工学、コンピューター・シミュレーション、品質管理などスピーカー設計と製造においては最先端のテクノロジーを持つ企業へと数年間で成長したと言う。フランス国内では既に JM lab に次ぐマーケットシェアを確保するほどの急成長を見せていると言う。

MOSQUITO の創立者は Marc NOUCHI 社長はスピーカーとそのデザインの改革に熱い情熱を注ぐ人物であり、フランス国内でもデザインと技術力を高い次元で融合させる研究を熱心に続けるエンジニアである。同じ情熱を共有する副社長 Hubert DUPREZ はセールス・マネージャーとして手腕を発揮している。

さて、肝心の音響エンジニアのトップは Philippe PENNA 氏が勤めているのだが、なんと彼の祖父はこのマルセイユで既にウッドレス・スピーカーを作り上げた経歴の持ち主であった。その影響もあって Philippe は幼年期からスピーカー音響の世界に親しみ、彼が養った知識と情熱が 2000 年から開始された“NEO”の開発に注がれているのである。

2005 年 4 月 15 日のこと、NEO を開発した MOSQUITO の皆さんが初めて日本を訪れ、同時にここ H. A. L. を訪問された。皆さんジェットラグのため睡眠不足の疲労が残っている中でも笑顔を絶やさず、記念撮影とあいなったものだ。皆さんは他国のオーディオショップを多数視察した経験をお持ちであるが、果たして自分たちが作り出した NEO が海外でどのように評価されているのか不安の面持ちであるが、数時間に及ぶ試聴とミーティングで更に新しい情報と将来性を知ることとなった。まずは H. A. L. での試聴の印象をどのように感じられたのか、後日レポートを頂戴したのでご紹介したい。



写真 1 写真左から 輸入元である CONEX JAPAN 株式会社 社長 Eric CHARLERY 氏 MOSQUITO 副社長 Hubert DUPREZ 氏 中央は川又 MOSQUITO 創立者 Marc NOUCHI 社長 MOSQUITO 音響エンジニアのトップ Philippe PENNA 氏

過去にも多数の海外メーカーの首脳陣が来訪されたが、私から要請した試聴の感想を文章でお送り頂けたという事例は大変稀なことである。

英文でもだめな私なのでフランス語などは当然理解できるものではなく、[Marc Nouchi 社長](#)からの原文はこのリンクで公開させて頂いた。

次に [Philippe PENNA 氏](#)からの原文も同様にこのリンクにて公開し、下記は輸入元の関係者による翻訳を記載したものである。

まずは MOSQUITO の創立者である Marc NOUCHI 社長からのメッセージ。



ダイナミックオーディオを訪れて

私達は NEO に大きな夢と期待を抱き、音楽の表現に必要なだと信ずるすべての能力を与えました。(スピーカーシステム制作者として、当たり前のことをしていただけですが…)

そして、NEO の才能を開花させることができる人を探すため、ヨーロッパ中、アメリカ中を歩きましたが、長年日本でビジネスをしているコネクスジャパンのエリック・シャルリーと出会い日本に進路を絞りました。

幸運なことに、彼が川又さんというスピーカーシステムを知り尽くした人を探し出し、NEO を預かっていただくことになったのです。

私たちはダイナミックオーディオを訪れるとすぐに大きな驚きを感じました。

そこは、プロフェッショナルリズムと厳格さだけで彩られており、既存のブランド名等ではなく、ただ性能だけが評価される場だったのです。

使われている機材も素晴らしいものでした！

私たちは日ごろ最良の機材を使って仕事をしているのですが、こんなに多く最高級の機材が集まった所を見るのは初めてでした。また、川又さんが設定するリファレンスシステムは優れたもので、構成部品と音響学的知識に完璧に基づいています。

川又さんはリスナーに対し、自分の意見や好みを押し付けることは決してしません。様々な音楽の趣味や好みを持つリスナー達をそれぞれに満足させるため、色々な機材や音楽を使い、NEO の性能を違った方法で引き出し、提示するのです。

そして、リスナー自身が自分の好みに合ったリファレンスシステムを見つけだすのです。私達も様々な機材に繋ぎかえた NEO で、色々な音楽を聴きました。それぞれ違った引き出し方でしたが、NEO の才能が毎回顕われていました。

私自身、普段は決して聞くことのないタイプの音楽も今回ダイナミックオーディオで聞き、改めて良さを感じた程です。数時間かけ、様々な方法で NEO を試聴をしましたが、時間が過ぎるのが何と早かったことでしょう！

今回ダイナミックオーディオを訪れ、かつては音楽家の卵だった NEO が川又さんの豊かな知識と経験で有能な演奏家に成長したのを私達は確認することができました。

これは、NEO の産みの親である私達にとって、本当に誇らしいことです。

Merci, Dynamic Audio!

Merci, Monsieur Kawamata!

代表取締役社長 Marc Nouchi (マーク・ヌシ)

以下の文は、私が試聴した印象を要約したものである。CD ごとの印象ではなく、音像、中高域の統合、低域再生、楽音の生成という観点からまとめたものである。

1.3.1 音像

Mosquito の試聴室にあるシステムのおかげで、私はすでに非常にすぐれた深さと解像度には慣れていたが、ここ High-End Audio Laboratory では既成の枠を越えていた。

音楽表現がどのように複雑であろうと（マーラーの交響曲の 100 人の演奏者、コラール、スカンジナビアの歌手あるいはジャズ室内トリオ）、左から右へと、そして二つのエンクロージャーのある位置からかなり奥まで、正確でリアルに、すべてが立ち顕われてくる。

音の高さは完全に保たれている。とりわけ中域と高域のすばらしい統合によって演奏者と楽器の立体再現が改善されている。おなじように注目すべきなのは、《フォルテ》での安定性である。交響楽団のそれぞれの演奏者が、浮き上がることなく、まるで床に貼りつけられているかのように、自在に描かれるのである！

1.3.2 中域と高域の統合、音色の保持

生まれて初めて私は試聴室で考え込むことがなかった。

楽音の音色は完璧である。

特に立体再現は完璧で演奏者の顔を描くことさえできる。中域は豊かで、明確で、速い。高域は…贅沢な程だ。

私はよくフランスの DIAPASON（音域）誌の編集長と話し合うが、交響曲で管楽器がフォルテで演奏される時に、鈴やシンバルをリアルに再現するのは、とりわけマスキングや特定の楽器音の突出を起こすことなく立体再現を保つというのは、非常に難しく、不可能とさえ言えるという点で意見を同じくする。

しかしながらここでは、マーラーあるいはビゼーの曲は完璧であった。

1.3.3 低域再生

私は勿論 Neo のほぼ完璧な低域再生を確認した。

即ち、速さ、明瞭度、重低音であっても音色を保っていること、そして重量感をである。Mosquito にある Electrocompaniet 社のユニット Nemo はすでに低域と重低音を非常によく制御しているが、ここでは反応速度のすばらしさが目にとまった。

低域の忠実な再生は私たちが持っているシステムで聞けるものとそれほど離れてはいないとしても、ここで用いられているシステム構成は、家にとっての基礎と同じように、音像の安定した構築の土台になっていると思う。

「あれは・・・、忘れもしない平成5年9月11日ステレオサウンド誌の第108号の表紙を見た瞬間に背筋に衝撃が走った。思わず「遂に出たか！」と呻き声を漏らしてしまった。これでも職業上の情報収集能力においては、各方面に張り巡らしたアンテナがあり、内外を問わず先行した情報が耳に入ってくるものだが、これは正に青天の霹靂というべき出会いであった。噂には聞いていたものの、この曲線といい、色合いといい、クローズアップされた姿を見たのは初めてであった。」

当時の衝撃に匹敵する驚きと喜びを感じたのが、このMOSQUITO NEOであった。私がスピーカーをデザインしたら、こうなるだろう・・・ということがズバリ具現化されたようなものである!! 昨日やっとMATRIX REVOLUSIONを自宅で見ることが出来たが、VRDS-NEOのネーミングで私が引用したNEOが今度はスピーカーで登場することになった。

私が輸入元の社長にいつ実物を持ってこられるのか?と聞くと、「明日の午前中に自分が運んできましょう!!」と、おっしゃる。私はこういうタイプの人、好きですね～(笑)国内に1セットしかないスピーカーの“NEO”を聴いてみたいという方はぜひご来店くださいませ!!

この輸入元というのはCONEX JAPAN株式会社というハイテク製品を輸入する会社であり、設立は1996年というから結構な実績を残しながら日本で成長を続けているベンチャー企業と言えるだろう。最初に輸入したのはドイツ製のIMS-CS RF Componentsというから、高周波電子パーツと言うことになる。それから三つの大きなプロジェクトでヨーロッパのハイテク企業から電子工学部品や光学製品なども輸入し、防衛産業にも関わる技術的に高度な製品を各種輸入して現在に至っている。

そのCONEX JAPAN株式会社の社長がEric CHARLERY氏であり、日本語ぺらぺらのバイリンガルである。このエリックが先週私に電話でコンタクトしてこられ、今回の“NEO”の日本におけるセールス・パートナーになって欲しいというアポイントがあったものだ。このエリックが実に親しみやすく、昨日の最初の会見からとんとん拍子で話しが進んだものだった。

また、ここに来られるまでにはステレオサウンド誌の某評論家氏の紹介があり、こんなスピーカーを取り扱えるのはカワマタさんより他はいないでしょうという推薦のもとに来訪されたと言う。

私の解説で物足りない方はどうぞこちらの [MOSQUITO - HI-FI & HOME CINEMA SYSTEM](http://www.mosquito-groupe.com/) web site をご覧下さい。http://www.mosquito-groupe.com/

“NEO” Physical feature

三年間の研究開発で生まれた“NEO”はフランス国内とドイツの一部で販売されているが、アメリカの市場には参入していないと言う。アメリカのハイエンドオーディオ市場に関しては急ぐことなく、日本のマーケティングを先行させようということらしい。そこでマーケティングのプロであるCONEX JAPANのエリックが“NEO”をプロモーションすることになったのである。

“NEO”は横幅が420mm奥行き630mm、高さは1,300mmで重量が70Kgである。日頃から100キロ以上のスピーカーに慣れている私から見ると扱いやすいサイズと重量である。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/pho/m-neo03.jpg>



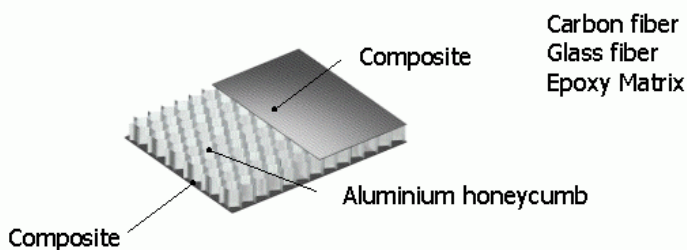
“NEO”のボディーは画像を見てもお解りのように一切の直線がなく、エアロダイナミクス・デザインである。複数の円、ゴールデンレシオ、オジーブ様式を基本としてシンプルで幾何学的な曲線の集合体としてデザインされた。

エンクロージャーはwebを見てもお解りのように、どこにも完全に平行面がないのである。このフォルムもコンピューター・シミュレーションによって音響的な影響を解析して定在波が発生しないように計算されている。

この独特なデザインのボディーは吸音材を注入したアルミハニカムを芯材として、両面をカーボンファイバーとグラスファイバーをエポキシでバインドしたコンジット素材ではさみサンドイッチ構造としている。その厚みは何と30mmという贅沢なものであり、振動エネルギーを瞬時にして減衰させ温度や湿度の影響も受けず理想的なエンクロージャーを形成している。

フロントメインバッフルは厚さ20mmの無垢のアルミからの削り出しである。その上部にサブ・バッフルが同様の厚さで削り出され8本のビスで強固に取り付けられている。トップに位置するトゥイーターはそれとは全く逆にフローティングされており、指でフレームを押してみるとダンパーを介してふわふわと動き浮いているのがわかる。これは賢い設計である。

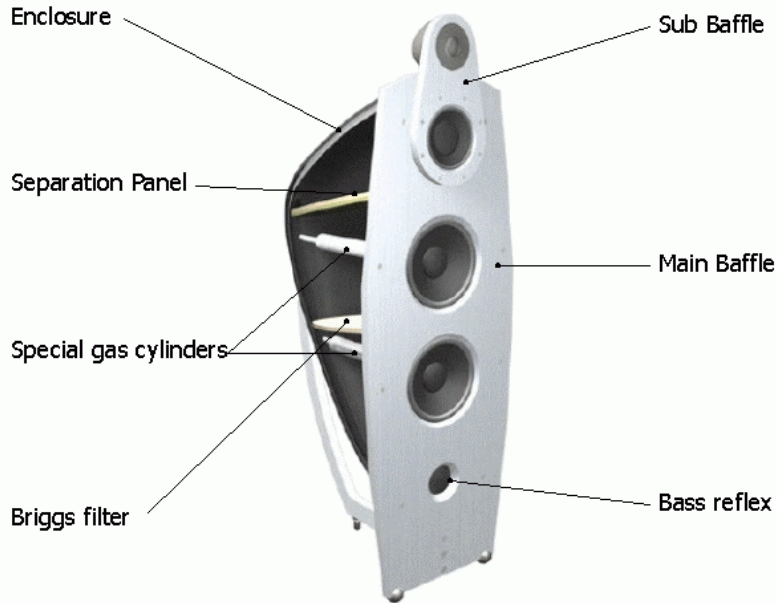
The Material of the enclosure



➡ No variation vs temperature or humidity



The Technology



このトゥイーターはフランスの Audax 社のもので、ポリエチレンでコーティングされた 2.5cm ソフトドーム型トゥイーターとなっている。ソフトドームながら高域特性は-3dB で 37KHz まで伸びているので、大変ニュートラルな印象を持つ。

フロントメインバッフルは厚さ 20mm の無垢のアルミからの削り出しである。その上部にサブ・バッフルが同様の厚さで削り出され 8 本のビスで強固に取り付けられている。

トップに位置するトゥイーターはそれとは全く逆にフローティングされており、指でフレームを押してみるとダンパーを介してふわふわと動き浮いているのがわかる。これは賢い設計である。

ドラムのような強烈なアタック、ギターやピアノのようにインパルス信号に近い高速の立ち上がり。しかも、それらの再生音に刺激成分、歪み感がないという“NEO”の音質で、ベース・コントロールということで解説しているが、低域のスピード感と解像度を両立させるという技術的なノウハウの資料がカタログベースであったので理解しやすかったものだ。

しかし、“NEO”の大きな特徴である弦楽器の再現性については、やはりトゥイーターとミッドレンジが決め手であろう。これについて私は両ユニットをどのようにバッフルに固定しているのかという質問を、正確に言えばどのようにしてフローティングさせているのかということを開き合わせたのである。

そうしたら、何と MOSQUITO の社内でわざわざトゥイーターをアッセンブルする過程を撮影して送ってくれたのである。



まず、これは独立したキャビティーを持つトゥイーターの構成部品である。左上のユニット本体と右側のカップ、それにフローティングに使用する特殊なダンピング素材であるアメリカのデフレックス社が開発した DEFLEX が下の黒い帯状になっているものである。しかし、敷物にダンボールではなくて、もう少し体裁の良いものを敷いて撮影してくれればよかったのに…(笑) と贅沢な感想を一言(^_^)



次にこの画像でトゥイーター後方のカップの肉厚感を見ていただきたい。当然これは“NEO”のために無垢のステンレスを削り出したものであり、これ自体が相当な剛性を持っているのはいうまでもない。このトゥイーターはフランスの Audax 社のものだが、それはこの画像で見られるユニット本体の後ろが黒いフレームになっている部分までであり、その外周のハウジングは MOSQUITO が作成したものにマウントしているのである。

そのハウジングの外周に肉厚な突起が周回しているのがお解りだろうか？



トゥイーターのハウジングの外周の突起部はなぜ必要なのか？ それはこの画像を見るとわかってくる。断面がU字型の DEFLEX を、これに挟み込むように巻きつけていくのである。

DEFLEX で外周をすっぽりと覆われたトゥイーター・ハウジングを削り出したカップにはめ込んだのがこの画像だ。つまり、トゥイーターのマウントには一切のビスやナットは使用せずに、最先端のダンピング材を介し完全にフローティングしているのである。



私は、大体ここまでは想像していたのだから、これほど様々な楽器に対して万能な対応力を持っている“NEO”は果たしてトゥイーターのみの貢献で成り立っているのだろうか？ と考えていたものだ。そして、いよいよトゥイーターをサブ・バッフルにはめ込んだのが次の画像である。



このようにトゥイーターを納めたカップをサブ・バッフル後方からはめ込み、削り出しのカップの外周がサブ・バッフルときっちりと接合して小さなビスをサブ・バッフルの頭から一本ねじ込んで脱落しないように固定しているのである。サブ・バッフルの左端にそのビス穴が見られる。

さて、この画像でサブ・バッフルの右側にミッドレンジが搭載される穴が見られるが、勘違いしてならないのは、その穴の周辺にす

べては写っていないのだが合計 8 箇所のネジ穴はミッドレンジ・ユニットを固定するためのものではなく、サブ・バッフルをメインバッフルに固定するためのものであるということだ。さて、それでは一体ミッドレンジ・ユニットをどのような方法で取り付けしているのだろうか？

先ほどの画像ではちょっと解りにくいのだが、サブ・バッフルのミッドレンジドライバーが位置する穴の外周なのだが、滑らかなスロープで縁取りを丸く削り落としているが、そのカーブはサブ・バッフルの肉厚の半分までしかなく、残り半分は後ろから見て一回り大きな直径で切り取られているのである。つまり、サブ・バッフルをメインバッフルにあてがうとミッドレンジ・ユニットのフレームの外周がすっぽりはまり込む空洞ができる仕掛けになっているのだ。

そして、上記のトゥイーターと同じように MOREL-UK から供給される 14cmDPC コーン型ミッドレンジドライバーのフレームの外周にも DEFLEX を同様にはめ込むように巻きつけて、二枚のバッフルの間に出来た空洞にフローティングして納めるのである。

現在は当社も MOREL のスピーカーシステムをオリジナル商品として独占販売しているが、ユニットの製造元である MOREL でさえも、このようなフローティング構造でのユニット取り付けはしていないものだ。

もしも、従来のようにトゥイーターとミッドレンジを金属のバッフルにビスを使って強固に固定したら、さぞかしキンキンとした音になったことだろう。このミッドレンジとトゥイーターの係が“NEO”の魅力の大きな部分を担っていると考えている。

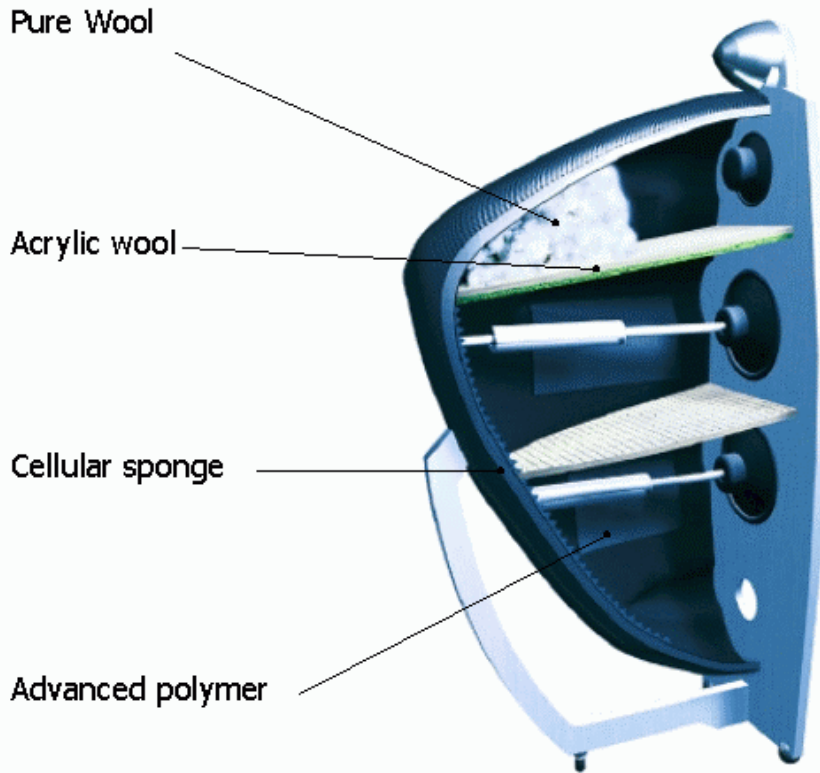
低域のコントロールは強靱なボディーに対して絶えず 25 キロという応力をかけてウーファーユニットをメインバッフルに向けて圧力を加え続ける。もちろん、ボディーそのものの設計もあるのだが、低域のより良い再生には剛性を高めるユニットの装着法を編み出した。逆に楽音の質感を支えるミッドレンジとトゥイーターはキャビネットに対して機械的なつながりを持たないようにアイソレーションするという巧みな装着法も同様に同社が編み出したものだ。世界中のハイエンドと言われるスピーカーを長年に渡り多数扱ってきたが、スピーカーを各論で考えずに総論で取りまとめた MOSQUITO の熱意と斬新なアイデアには拍手を送りたいものだ。

次に厚みが 40mm にも及ぶサブ・バッフルの下側にマウントされたミッドレンジは Morel-UK から供給される 14cmDPC コーン型ドライバーである。22cm 口径の二個のウーファーも同様に Morel-UK のものであり、これらはネオジウム・マグネットを使用した NeoLin シリーズと称されている。

さて、トゥイーターはフローティング構造であるということを述べているが、それとは対極的なのが二個のウーファーの固定方法である。他のスピーカーのようにウーファーユニットの周囲にあるべきはずの固定用のビスが見当たらないのである。

実は、上記の素材による高剛性のエンクロージャーの後方からガスシリンダーのシャフトをウーファーユニットの後部にあてがい、何と 30 キロの応力を加えてフロントバッフルに圧着しているのである。もちろんウーファーの金属製バスケット・フレームが直接フロントバッフルに接しているわけではなく緩衝材をはさんでフローティング構造としているのである。

The Amortization



ガスシリンダーからの圧力がウーファーのフレームからフロントバッフルへと伝えられ、均一に分厚いバッフルに圧着させることでウーファーの発する機械的な振動はエンクロージャーとバッフルの両方向へ伝播し、バッフルの足元にある二個のステンレス球と後方にある1本スパイクによって迅速にメカニカル・アースが取られるのである。このステンレス球はフロントバッフル下部を削り取った窪みに巧妙にはめ込まれるようになっており、機械的にスピーカー本体にも床面に対してもワンポイントの接点で支持されるようになっている。

とにかく、木のボックスによるエンクロージャーの考え方とはまったく違い、変調されたエネルギーをスピーカー内部に溜め込んで位相をずらして放出するようなことがないのでメカニカル・ハイスピードという表現で“NEO”のボディーを語りたいものだ。

次に電氣的に各ユニットの使い方を見てみよう。トゥイーターの下側のクロスオーバー周波数は4.2KHzと意外に高いところに設定されている。この口径と同じハードドーム型トゥイーターを使用している他社システムの多くは、大体2KHzから2.7KHzくらいでクロスさせているものが多いのだが、4.2KHz以上を受け持たせるというのは大入力の際の歪み率では大変有利であり、後ほど述べる再生音の特徴にも大いにつながってくるものなのである。

さて、トゥイーターがこのようなゆとりある動作が出来るということに関して実はミッドレンジ・ユニットに秘訣があるのである。下記の随筆は8年前に執筆したものだが…、

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/oto/oto35.html>

ここで初めてMorelのユニットを搭載したEGGLESTON WORKSのANDRAについて述べているのだが、とにかくMorelのドライバーをミッドレンジに使用するとクロスオーバーはワイドに設定できるものであり、ミッドレンジとトゥイーターのつながりを考慮すると-6dB/octというシンプルな一次フィルターで済むので位相の乱れもなく、音楽の中心となるミッドレンジを生き生きと鳴らすスピーカーシステムを設計しやすくなるのである。

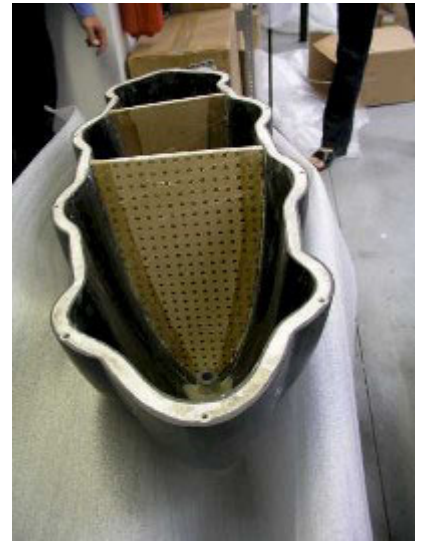
“NEO”のミッドレンジは600Hzから4.2KHzを受け持つバンドパスフィルターで設定されているが、この上下も-6dB/octという緩やかなスロープ特性でつないでいる。ただし、前述

のトゥイーターの下側スロープは-12dB/oct という特性で、なるべくトゥイーターにはミッドレンジの成分を混入させないという配慮が見られる。そして、ウーファーのクロスオーバーは 600Hz となっており電気的には3ウェイ構成となっている。しかし、ここでもう一つのノウハウが2個のウーファーに生かされているのである。

実は“NEO”を“ウッドレス・スピーカー”と称しながらも、エンクロージャー内部には二枚の仕切り板が組み込まれているのである。これは幾何学的なデザインのボディー内部にしっかりと形状を適応させるための選択であるが、そこにも細かい配慮がなされている。

まず、この二枚の木板はアメリカのスピーカーメーカーが盛んに述べている“ブリージング”と呼ばれているエンクロージャーが呼吸するような微妙な変形を抑制するための補強ではなく、ミッドレンジと二個のウーファーの音響的な作用を作り出すためのものなのである。そのために剛性は求められておらず、二枚の木板の配置も各々縦横に違う角度で取り付けられており平行面をなくすように設定されているのがこの画像でも観察できるだろう。

そして、このミッドレンジのキャビティを構成する上の木板表面にはアクリルウールが貼り付けられており、ユニット後方へ放射される高域成分を吸収するよう配慮されている。ミッドレンジ後方のキャビティには天然ウールが詰め込まれており、ミッドレンジ・ユニットが後方に放射する 4.2KHz 以上の帯域も自然減衰させるように配慮されている。



次に上側のウーファー後方のキャビティは前述のガスシリンダーのシャフトが中央に位置しているが、吸音材は特に詰め込まれていない。しかし、ウーファー後方のキャビティ内部表面には約3センチ厚のウレタンが敷き詰められており、吸音する帯域を中域から低域にまで拡大しながらコンポジット構成のボディーをダンプさせているのである。

また上記の内部の画像からキャビティのセパレーターとして取り付けられた木板に小さい穴が多数開いているのが見受けられる。これは上側のウーファーが後方に放射する 600Hz 以上の中高域成分は上記のように内部壁面のウレタンで吸収させつつ、上部ウーファーのダイヤフラム後方に放射される背圧(バック・プレッシャー)の波長の長い低域成分を下側のキャビティに抜く、いわば空気穴として機能させているのである。

二つのウーファーユニットの間には内部構造の写真のように間仕切りのボードがはめ込まれているのだが、これを彼らは「フィルター」と呼んでいた。この小さい穴が多数あいているボードが二つのウーファーのバックプレッシャーを低い周波数に向けては開放し流通させ、低域のテンションを引き締めて極めてハイスピードな低音を叩き出すのである。

そして、周波数が高くなるにつれて独自のデザインによるエンクロージャーの形態と内部の吸音材による消音効果で中域に至るバックプレッシャーを減じる工夫がされている。そこに33Hzにチューニングされたバスレフポートの効用が引き立つので重量感があり解像度が素晴らしい低域再生が可能となっているものだ。このように見えないところにノウハウを発揮しながら、上側のウーファー用キャビティはクロスオーバー周波数 600Hz 以上の中高域に対しては密閉型エンクロージャーとして働き、同時に 600Hz 以下の低域方向に対してはエア

ーを抜くことでトランジェント特性を高めているのである。だから、この多数の小さい穴を上側のセパレーターのように吸音材を貼り付けてふさいでしまわないようにしているのである。

次に下側のウーファーだが、これは電気的には上と同様に 600Hz 以下の信号を入力されているのだが、バスレフのポートチューニングが共振周波数 33Hz で設定され、更に低域まで再生帯域をエクステンションさせているのである。能率は 92dB/2.83V/1m、400W の最大入力というパワーハンドリングを可能にして、“NEO” の総合的な再生周波数帯域は-3dB で 27Hz~37,000Hz、-2dB では 30Hz~22,000Hz というワイドレンジを確保しており、1KHz における歪み率も 0.12% というスペックを持っているのである。

最後にカーボン・コンポジット構成のボディはブラックの他にイエロー、レッド、ブルーと標準色が選択できるほか、有名な高級車であれば、そのカラーコードで好きな色に仕上げることも出来るものだ。更に現在では、このようにいわゆる塗りつぶし塗装ではなく、NEO のデザイン上での魅力ともなっているカーボンの繊維を半透明に見せてカラーリングする方法も開発が進んでいる。



ドイツのショーで MOSQUITO のブースに展示された“NEO”にご注目頂きたい。鮮やかなブルーと一部イエローの背中が見えるのだが、車と同じ塗装工程による仕上げで高級感をかもし出しているものだ。

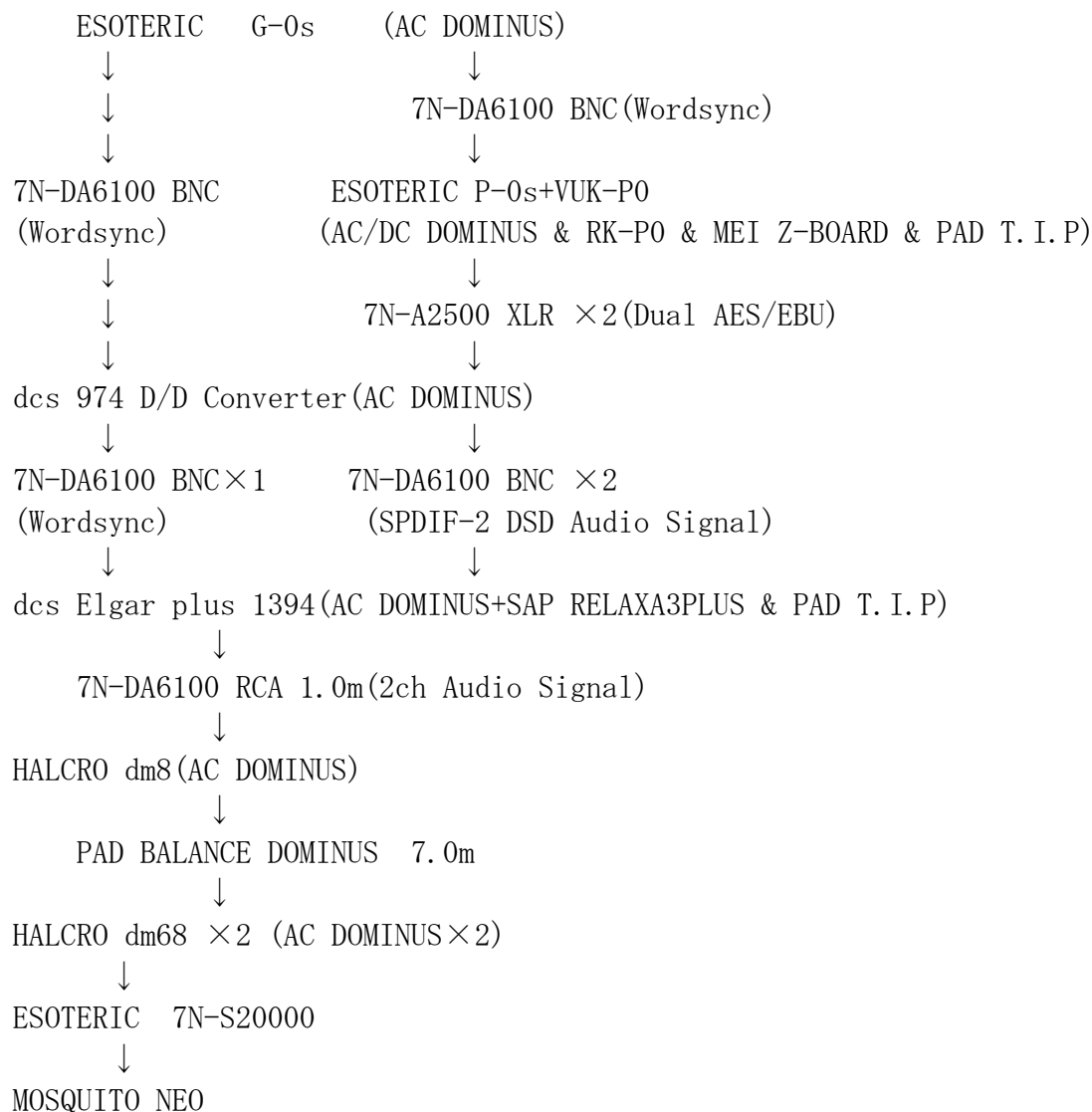


“NEO” のデビュー当時における検証-その 1. ベース・コントロール

ちょうど当時は“MEXCEL Cable”の評価のために、前回は Nautilus を使用していたので MEXCEL スピーカーケーブルを登場させることは出来なかったが、シングルワイヤーで接続する“NEO”については下記のようにいよいよ 7N-S20000 を使用することになった。ちなみにここに導入した 7N-S20000 は特注の 5.0m なので価格は¥5,840,000 という恐ろしい金額になってしまった^_^; このケーブルは Bi-Wire が出来ないので、同じものをもう 1 ペア用意したので、結果的には倍のコストがかかっていることになる。

下記のシステムで本日数時間の試聴を行ったことで、当時はショートエッセイを緊急に執筆しようという気持ちになったのだが、ちょうど本日は時間切れのようである。これから念のために一晚システムエンハンサーをかけて入念にバーンインを行い、明日じっくりと聴き込んでから試聴レポートを作成することにした。

-*-*-*-今回のリファレンスシステム*-*-*-*-



一月はやい五月晴れ? とも言える快晴の日曜日、夕べの一晚の熟成がどのように音質を研ぎ澄ましたのか期待に胸膨らませて出社した。

最初から大編成というよりは最近聴きなれている曲からということで、押尾コータロー『STARTING POINT』 6. Merry Christmas Mr. Lawrence をかけた。
<http://www.toshiba-emi.co.jp/oshio/>

「あら～、この気持ちよさは一体なんなんだ!!」

MEXCEL スピーカーケーブルの貢献ももちろんあるのだろうが、情報量としての余韻感については申し分ない。いや、ひょっとすると私がこれまでに聴いてきたスピーカーの中でもトップクラスかもしれない。

私がセッティングした MOSQUITO NEO の左右のトゥイーター間隔はピッタリ 3 メートル、私が試聴しているポジションでトゥイーターの耳の距離は約 3.7 メートル。これは私が距離を測りながらセッティングしたわけではなく、この試聴室の音質傾向を知っている私が聴きながら合わせたポジションである。

MOSQUITO NEO のセンターに押尾のギターがピン!!と立ち上がったと思ったら、その両翼に光の尾を引くようにエコー感が拡散していく。のっけから音場感の広さには文句の付けようがないことが瞬間的に理解された。

そして、特筆すべきはギターの質感に刺激成分が皆無であり聴きやすいことだ。この第一印象はこれから述べていく MOSQUITO NEO の総合的なパフォーマンスのおおもとの特徴として最初から感じられたことなのだが、今までテンションがパリパリに張り詰めたガット(弦)をピーン!!と弾いた後にキラキラと輝くように飛散するエコー感とは質感が違うのである。

次に 12. HARD RAIN にスキップした。この曲はギターのボディをヒットしての低域が織り交ぜられ、それが本来のギターの低弦とのリズムと絡み合うように独特の重量感をかもし出しているのだが、この低音階の響きの一部分が取り残されるようにして位相が遅れてしまうと直ちに解像度が低下してしまうというチェックポイントがあるのだ。

しかし、MOSQUITO NEO の低域は早い!!

どの低音も置いていかれるものは一つもなく、全てが一様のスピード感で再現されるので、音像が膨らむということがない。これは凄い!!

では、低域の絶対量と重量感はどうなんだろうか? そこで…。

まずは倍音成分を多く含み、スピーカーシステムの低域再生に関して質感をチェックしやすいウッドベースの録音で早速試して見ることにする。

BRIAN BROMBERG 「WOOD」よりソロのベースで鮮明な録音で以前からテストに多用しているのが 11. Star Spangled Banner、この原題だとわかりにくいが必要に「星条旗よ永遠なれ」である。さあ、どうなるのか!? <http://www.kingrecords.co.jp/saisin/bass/index.html>

ここで演奏するフロアー型スピーカーでも口径 22 センチというウーファーのものではなく、そんな小さな口径のウーファーがどの程度の重量感を見せるのか? ちょうど B&W の Nautilus802 のウーファーが口径 20 センチなのでいい勝負なのだが…!?

「おお～、これはいい!!」

ベースのソロはスピーカーにとって、位相を遅らせてもキャビネットのサポートを受けて量感を補う性格の低域を付加しているものもあるが、この曲の冒頭の強烈なピッチカートが弾かれた瞬間に私の疑問点は霧散してしまった。前述のように MOSQUITO NEO の二つのウーファーは電気的には 600Hz というクロスオーバーを与えられているのだが、各々はエンクロージャーを独立させることによってメカニカルに低域のみの 2 ウェイ構成を実現している。たった 22 センチのどちらかと言うと小型ユニットなのに、このときの BRIAN BROMBERG のウッドベースは重量感たっぷりに私の眼前に展開した!!

バスレフポートを持っているスピーカーはウーファーの正面に放射される低域と、0.何秒遅れでポートから排出される低域成分の両方を知らず知らず聴かされているものだが、ポートからの低域に位相遅れがあり同時にキャビネット内部の共鳴、定在波などの不要成分を含んでいると演出的に量感を追加する働きをしてしまうものだが、MOSQUITO NEO は「そんな幼稚な設計ミスはしていないよ!!」と言わんばかりに正確無比な低域をハイスピードに再現するのである。私の内心では思わず拍手喝采である。

必要にして十分、どころか他社のスピーカーで演出効果として誰もが甘んじて受け入れてきた、いやそれを好みの範疇としてスピーカーの個性として片付けてきた低域のあり方に一石を投じるベースを MOSQUITO NEO がこともなげに実現したのである。

さあ、弦楽器での低域の再現性はわかった!!

では打楽器での低域はどうなんだ!? 気に入ると意地悪になる性格なのか、妥協したものはここに置きたくないという信念の現われなのか、次なるテストのために私は選曲を変えた。実は、その後の一時間というもの、私は聴き惚れてしまって、この原稿の執筆を忘れてしまうほどだったのであるが…!?

~*~*~*~*~*~*~*~*~*

私はスピーカーの低域再生に関しては、コントラバスやオルガンのように継続する楽音と、ドラムやパーカッションのように瞬間的に立ち上がり消えていく打撃音との二種類で必ずチェックするようにしている。さて、MOSQUITO NEO の 22 センチウーファーは私の求める要求にどこまで応えてくれるのだろうか!?

私のテストでは瞬間的に 500W から 800W 程度を出力することもあり、まさにテストコースで開発中の新車で最高速度での挙動を分析するような過酷ともいえる状態を作り出している。もちろん、いつもそんな大音量で全てを聴いているわけではないが、打音のように瞬間的なものは人間は音量感をさほど感じずに、小さな音量でも連続する音は大きく感じるものである。ドラムのテストでは私は限界ぎりぎりをスピーカーに入力しているものだ。

まずはスタジオ録音で正確にコントロールされなければいけないものをということで、これまでにも頻繁にテストにしようしている fourplay の「The Best of fourplay」(WPCR-1214) の 5. chant の冒頭 20 秒間に入っているハーヴィー・メイソンの強烈なフロアタムをかけることにした。

現在ここに展示しているスピーカーは、皆このようなテストに合格したものばかりであり、

随筆などでご紹介している Nautilus や Avantgarde など同様に高いハードルをクリアしてきたものである。さて、ボリュームをじりじりと上げてからスタートさせた…!?

「こっ…、これは!!」

軽々と叩き出されるというのだろうか? 心配していた口径の小ささなど微塵のかけらもないほどに払拭する打音の鋭さと、残響として残されるドラムヘッドのバイブレーションがこの 55 畳ある室内の空気に感動的な波動を与える。これは凄い!!

次に GRP の名作である Dave Grusin の「MIGRATION」の 1. PUNTA DEL SOUL 2. SOUTHWEST PASSAGE と連続して見事にスタジオで管理されて録音されたドラムの鳴り方を観察した。テンションは見事に張り詰め、適度に EQ とリヴァーブがかかったドラムが爽快に鳴り響く。Nautilus801 のように 38 センチという大口徑のウーファーが叩き出す低域とは違い、高速反応する MOSQUITO NEO の 22 センチウーファーは決して打音の構成要素に遅れを出すことがない。とにかく早い!! これを軽い低音と錯覚されることもあるだろうが、数々のスピーカーを聴いてきた私が判定するに低域の再生帯域は十分に延びており、重量感が不足するということはない。見事だ!!

さて、同じスタジオ録音でも楽音に手を加えていないアコースティックな録音のドラムでどうなるか、次の選曲に移る。

「TRIBUTE TO ELLINGTON」 DANIEL BARENBOIM AND GUESTS

<http://www.daniel-barenboim.com/recordings/398425252.htm>

13. Take the 'A' Train の冒頭にあるドラムロールを久し振りに聴くことにした。思えば B&W の Signature 800 で数々のアンプをチェックする時にも、このドラムが色々なことを教えてくれたものだ。さあ…!?

「あ〜、そうだったのか!! こういう録音だったんだ!!」

前述のようにスピーカー内部に極めて短時間蓄積された低域がエンクロージャーとポートチューニングの影響によって個性として認められる低域を個々に出していた。私は過去のそれらを否定するつもりはないのだが、ここで聴くことになった MOSQUITO NEO でのドラムは付帯する響きを取り除いていくと何が残るのかという明確な事実を私に叩き込んだのである。

低域の打撃音の楽しみ方に重量感というものがあるだろうが、録音に入っていない低域成分を旨みとして加える傾向があったのだろうか? それだけを聴いている分にはいいのだが、MOSQUITO NEO の低域は見事に贅肉を取り去り、ドラムヘッドにスティックがヒットする瞬間のみを忠実に捉えるのである。そこに打撃音の膨張という現象は皆無なのだ!!

さあ、面白くなってきた!! 次をかけよう!!

dmp の Morello Standard から Take Five を聴く。

<http://www.dmprecords.com/CD-506.htm>

続けて、もう一枚の Joe Morello をかけてみる。

Going Places からは、この一曲 Autumn Leaves である。

<http://www.dmprecords.com/CD-497.htm>

低域を検証して次に進まなければ…、という内心の思いとは逆に次々に曲を聴きたくなってしまう魅力が MOSQUITO NEO にはあるようだ。さあ、この二曲で私は更なる驚きを体験することになる。

キックドラムである。先ほどまでのドラムは大きなタムをヒットしての音色に音響的な調味料を上手に加えて、見事にオンマイクなドラムを展開してきたものだが、この Joe Morello はそんな手加減はしていない。

この人のキックドラムは手を加えることが少ないアコースティックでシンプルな録音であり、それ故にスピーカーの低域のキャラクターによって再生音も色々と変化する。特に大口径のウーファーでは録音に入っていない「バフッ!!」という独特の付帯音が追加され知らない間にそのスピーカーによる“楽しさとしての演出効果”にもてなされていることがあるものだ。しかし…!?

「そうそう、本当はこうだろう!!」

「タンタン!!」と小気味良く切れ上がり余分なものを残さずに、それでいてスピーカーが構成する前方の空間に大きく広がることなく音像を確立する。

そう!! これですよ、これ!!

これを淡白な低音としたら、他の低音は肥満体になってしまうのか?

よ～し!!

ドラムのチェックの最後はやっぱりこれだ。Audio lab の「THE DIALOGUE」から (1) WITH BASS と (3) WITH VIBRAPHONE のトラックだ。

http://www.octavia.co.jp/shouhin/audio_lab.htm

口径 22 センチの MOSQUITO NEO に対して、これまでには Avantgarde の BASSHORN や大型システムで散々聴き込んで来た曲だが、どうなるのか!?

「これでいいんですよ!! ドラムのサイズは!!」

高さが 1.3 メートルという MOSQUITO NEO が私の目の前に作り出した音楽が映るスクリーンの大きさは、これまでに体験した他のスピーカーに対してその身長にふさわしく巨大なものとはいえないだろう。

しかし、各ドラムのパートの音像が見事に引き締まっているので、各々の打音の輪郭が重複することなく、個々の分離を維持して展開するのだ。打音の印象はこれまでと同じなのだが、録音過程での操作をしていない録音の成果が明確に音像のセパレーションとして理解できる。そして何よりも気分爽快なテンションでパーカッションが弾けるので、余分な響きを否定し排除するという MOSQUITO NEO の真髓が思わぬところで確認できた。

これは私が長年唱え続けてきたエンクロージャー(箱)の存在感がないスピーカーである。素材とテクノロジーという設計の妙味が素晴らしい低域の再生を可能にしたのである。しかし…、低域の反応を確認するために実に多くの時間を使ってしまった。先を急がねばと思いつつ、次なるチェックポイントは既に頭に浮かんでいた。

“NEO” のデビュー当時における検証-その 2. ハーモニーと空間表現

ここまでで相当な時間を使ってしまったが、逆に言えば私がこれほど聴きたいと思うスピーカーは滅多にない。そして、今回のシステムの中核である HALCRO の超低歪みというポリシーと MEXCEL スピーカーケーブルのパフォーマンスが重要な構成要素であることも述べておきたい。

さあ、大音量でのインパルス応答の快感にしばし酔いしれていたが、次はぐっと音量も控えめな曲(笑)で更に MOSQUITO NEO の検証を続けていくことにする。多用な楽器が背景を埋めてヴォーカルも同時にチェックできるものをと「Muse」からフィリッパ・ジョルダーノ 1. ハバネラをかけることにした。

http://www.universal-music.co.jp/classics/healing_menu.html

毎度お馴染みの曲なのだが、導入部が始まったときに私は言葉を失ってしまった。こんなことってあるのか?

「Nautilus 同様にヴォーカルが浮かんでいるぞ!! これは凄い!!」

スピーカーだけにスポットを当てすぎるつもりはないのだが、他の構成要素は以前からここにあったものであり、新たに MEXCEL スピーカーケーブルが加わったと言うことはあるのだが、左右の MOSQUITO NEO にはさまれた空間にたった二つの音源しかないという事実を忘れさせてくれるほどに見事な中間定位でフィリッパのヴォーカルとバックコーラスが並ぶのである。

そして、散々言い尽くしているが MOSQUITO NEO の低域のコントロールがこの曲で一定のリズムで繰り返されるドラムにまたしても発揮されている。音像が引き締まり、ヴォーカルの立ち位置を邪魔することなく、各パートに低域の混入を防止している様子が良くわかる。さすがである!!

そして、Audax 社のソフトドーム型トゥイーターと Morel のミッドレンジの連係によるものなのか、極めてスムーズで滑らかなヴォーカルの質感が心地良く耳をくすぐる。そう、もっと音量を上げて大丈夫よ、とフィリッパがしゃべれるはずもない日本語で語りかけてくるようだ。この声の質感と時折フォルテでバックが盛り上がるパートなどもメタルドーム型のトゥイーターによる演奏とは違い決して眩しくない。音量を上げることを室内の照明の明るさを調光器で強く明るくしていったということに例えると、MOSQUITO NEO で聴くヴォーカルはいくら強くスポットライトを当てても音量を上げて決してぎらつくことなく、平常心で歌手を見つめることが出来る質感の素晴らしさが感じられるのである。この感触はたまらない!! では次は…? これもおなじみで大貫妙子の“attraction”から5トラック目ご存知の「四季」である。http://www.toshiba-emi.co.jp/onuki/disco/index_j.htm

「うっとりするような声だ、こんな感触は初めてだな〜!」

“ウッドレス・スピーカー”という表現は私も今回始めて使ったものだが、木を使ったスピーカーでの傑作があるのは事実である。しかし、木材という機械的な変位をする素材を使うにはそれなりの設計が必要であり、ただウッドという触れたときの感触からのイメージで温かみのある音質のスピーカーだというのは短絡的ではなからうか? 国産でもモルトウイスキーの樽でスピーカーを作ったというシャレもあったが、ユーザーの既成概念を上手くセールスポイントに生かしたというところもあるだろう。

一切の木材を使わないスピーカーとしては GOLDMUND の EPILOGUE を私は大変高く評価している。<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/oto/oto41.html>

また、カーボンファイバーを使用したスピーカーも過去に傑作があった。
<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/oto/oto33.html>

このようなハイテク素材を使用した事例では金属臭というか、硬質でひんやりした冷たさや鋭さという言葉でのイメージを持っているのが普通だろうが、実は優秀な設計者に手にかかるウッドよりも人間味と温度感をたたえる演奏が出来てしまうのである。このときの大貫妙子の声には極上のシルクの手触りを思わせる“天然素材の演奏”という印象が瞬間的に私の頭の中にひらめいたものだ。そして、バックのストリングスが同様に素晴らしい質感だ。エコー感は申し分なく潤いを含み、MOSQUITO NEO の身長以上の空間提示をしているのではないか。

これはひょっとして、Nautilus のお家芸のはずではなかったのか??

次第に Nautilus や Signature 800 の独壇場として私が認知していた領域が何と MOSQUITO NEO によって鮮やかに更新されていくではないか!!

「それをできるのは B&W だけじゃないぞ!!」と言わんばかりだ!!

バックの弦楽器の美しさとヴォーカルのしなやかさを聴き進むうちに男性のヴォーカルでも確認しなくては、と次なる選曲である。

RUSSELL WATSON である。つい先日 TBS のニュース番組に出演してオ・ソレ・ミオを生で歌っていたが、好青年という印象であった。

<http://www.universal-music.co.jp/classics/watson/index.htm>

まず『The Voice』から 1.Nella Fantasia

イントロが始まったところで、またまた私の口はあんぐりと開いたままになってしまった。この音場感の広さと背景に並ぶオーケストラそしてコーラスとの奥行き感は何んということだろうか!! そしてここでもグランカッサを静かに叩いてごく低い周波数でのリズムが時折繰り返されるのだが、その質感が素晴らしい。重々しい低域だと思っていた他のスピーカーでは、実はグランカッサを床に置いて叩いていたのではとってしまうほど、MOSQUITO NEO では打音そのものがちゃんと他の楽音と同じステージに乗っているかのように宙に浮かんでいるのである。

クロスオーバー・クラシックという呼び方でホール録音の楽音をスタジオワークで巧みにヴォーカルと重ね、一つの音場感に組み上げてしく手法は最近の流行であるが、それにしても中空に定位する楽音と余韻の浮遊感私の認識では Nautilus が最高であったのだが、今ここで歌っている RUSSELL WATSON の背景描写は Nautilus のレベルに達しているのではないかと、という疑いが私の胸中をよぎっていく。

さて、次は 12.Funiculi - funicla

背後のオーケストラもそうだが、バックコーラスの広がり各パートの鮮明さはなんとし

たことだろう。しかも、RUSSELL WATOSON の声と決してオーバーラップすることなく、エコーが飛び散るように空間に尾を引いて消えていく。素晴らしい!!

14. 誰も寝てはならぬ Nessun dorma!

静かに合唱が Nessun dorma の主題を繰り返し、次第に盛り上がる中で RUSSELL WATOSON の声量がステージを埋め尽くすように展開していく。しかし、ここでも私の目と耳を奪っていたのは中間定位の素晴らしさである。この中間定位とは左右のスピーカーの間の音源があるはずもない空間に定位するという音響的虚像のリアルさを述べたものであるが、これを逆説的にたった一言で表すと次のようになる。

「スピーカーが消える!!」

あ〜、まずい!! Nautilus の専売特許であったはずの最大のセールストークがデビューして一年目という新参者に奪われてしまったのか!!

ギター・ソロ、ウッドベースのソロ、ドラムなどで MOSQUITO NEO の正確な楽音のコントロールの有様を確認し、次にバックの演奏が色々なヴォーカルで音場感のあり方も確認した。しかし、もう一つ確認しておきたい楽器がある。

そう、ピアノだ!!

しかもソロの演奏で聴きたい。私はスタジオでの録音で程よいお化粧を施した例として「WIZARD OF OZONE〜小曾根真ベスト・セレクション」UCCV-2003 の 11 トラック「We're All Alone」を。

http://www.universal-music.co.jp/jazz/j_jazz/ozone/m_ozone.htm

そして、ヴァレリー・アフアナシエフによるムソルグスキー「展覧会の絵」を前回同様にチェックして見ることにする。私が使っているディスクは 13 年前の初版のものなのでディスク No は COCO-9046 だが、最近では下記のように再販売されている。

<http://columbia.jp/crest1000/list111-120.html#crest118>

<http://columbia.jp/classics/index.html>

インパルス応答性能を思わせる立ち上がりの鋭い楽音は同時に余韻感も聴きどころであり、これまでにテストしてきた曲はどれも両方が同時に検証できるものだ。そして、ピアノの質感も上記の曲を使って色々なシステムで各々の特徴をよく引き出してくれたものだ。さて、どうなるか!?

まず上記二曲において安堵感ともいえる十分な余韻感が片やスタジオワークでの巧妙なりヴァーブから、そして片やフランクフルトにあるドイツ銀行ホールにおけるエコー感として、MOSQUITO NEO は演奏時間が累積されるほどにみずみずしくなるかのように絶妙の音場感を発生させる。これはいい!! そして、聴き進むうちに…!?

「待てよ〜? 今までのスピーカーで聴いてきたピアノの質感と違うぞ!？」

全くシンプルであり、かつ私の過去の記憶のファイルをいくら探してもこのようなピアノの質感が思い当たらないのである。

高炭素鋼で作られたピアノの弦がハンマーに叩かれて音が出るという原理は誰でも知っていることだろうが、木製の芯にフェルトを巻きつけたものがピアノのアクションにずらりと並ぶハンマーであるということを思い出させてくれたのである。

まさか、このハンマーの芯材が金属やプラスチック、あるいはセラミックのように非常に剛性が高いもので作られているピアノを数多く聴いてきたのではなかったのか!? と、自問してしまった私がそこにいたのだ。

MOSQUITO NEO が聴かせるピアノはいずれの録音でも、聴く者をピリピリさせるような緊張感をもたらすことは決してなく、打音の瞬間が程よい引き締め方をしながらも冷たく硬質に感じにならないのである。実に聴きやすく、それでいて十分な解像度と余韻感が両立しているのだ!!

一音ずつが明確にセパレーションしながら各々のエコー感を放射し、それでいて金属的な響きは皆無であり、本来の響きはカエデやメイプルという主材料でピアノが作られているということがイメージとして伝わってくるかのようである。響きが重なる和音が幾重に展開しても、音源の輪郭を細かく描写し、それでいて“人肌”に優しい質感が今までになかったピアノの音色となって耳なでていくようだ。

さあ、解像度ありテンションあり、しかし、そこにしっとりとした落ち着きをピアノで提示できるということは、多数の楽器群でハーモニーを構成するオーケストラではどうなってしまうのか? MOSQUITO NEO の最終チェックはいよいよオーケストラに迫っていく!!

“NEO” のデビュー当時における検証-その 3. オーケストラを極める

ヴォーカルという主題でチェックしたつもりが、それを取り巻く全体像としてステージにあるべきもの全てを見事に再現する MOSQUITO NEO だが、最も私が素晴らしいと感じている楽器がある。弦楽器である!!

フィリッパ・ジョルダノや大貫妙子のバックでも、そして RUSSELL WATSON のステージでも私が過去に覚えのあるヴァイオリン、ビオラ、チェロ、コントラバスなどの弦楽器群の質感が素晴らしいのである。

いよいよ MOSQUITO NEO の分析の締めくくりはオーケストラにしようと思っていたのであるが…。実は、昨日はバーンインを終えるのももどかしく数曲オーケストラを聴いたのだから、それがまた最高であった!!

この私は多くのブランドを扱うので“最高”などという表現は滅多に使わないのであるが、昨日はオーケストラばかりを聴いていたのである(^_^)

なぜ、それほど MOSQUITO NEO でのオーケストラに衝撃を覚えたのか?それは前回の小編『音の細道』*第 2 7 弾*続編で「ESOTERIC“MEXCEL Cable”と Connoisseur 5.0 が鳴らす Nautilus!!」に登場するこの曲、セミヨン・ビシュコフ指揮、パリ管弦楽団によるビゼー「アルルの女」「カ

ルメン」の両組曲である。(PHCP-5276 廃盤)を時をほぼ同じくして聴いた時の印象があまりにも強烈であったからだ。

1. 前奏曲が始まった瞬間に只者ではない描写力が私を襲った。それは主題を演奏する弦楽器群の存在感がしなやかな質感とともに空間に浮かび上がったからである。

まず、オーケストラの弦楽器群を一つに束ねてしまったように聴かせるスピーカーは意外と多いものだが、対象比較の実例をその場で聴かないと一般的にはわかりにくいことだろう。しかし、MOSQUITO NEO で聴く弦楽器は各パートごとにまるで空間にブラシをかけてストリングスの流れに方向性を付けながらも個々の演奏者の存在感をきちんと区分けして聴かせるという解像度の素晴らしさにある。

次に、弦楽器の質感なのだが、これを例えるには難しいが上等なシルクのハンカチを二の腕にかぶせてそうっと引っ張るときの肌の感触と例えたらどうだろうか。艶やかであり光沢があり、その上しなやかなので摩擦とはいえない人の肌に優しい感触をともなってハリりと落ちていくのである。それに比べると今ひとつの出来栄えのスピーカーでは、生成りの生地か手ぬぐいを肌に感じたようなものである。

この一本一本の弦楽を分離する見事な解像度と、本当に耳に心地良い感触という質感の素晴らしさがオーケストラを聴くことに快感を覚えるほどの興奮をもたらしてくれたのである。

ソリッドウッドによって作られた名器、sonusfaber の Guarneri Homage に関しては下記に詳細を述べているが…、正に私は Guarneri Homage の質感にマッチした低域をペアリングさせたスピーカーが表れたという例えもオーバーではないと考えている。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/oto/oto11.html>

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/oto/oto16.html>

8. ファランドールでは前奏曲と同じ主題を管楽器といっしょに繰り返す始まるのだが、このときの管楽器の質感もまた素晴らしい。それはヴォーカルのサ行の発音が MOSQUITO NEO では心地良く聴けるという特徴にも通じるものであり、管楽器のエコー感を鮮明に振りまきながらも耳に刺さるような刺激臭は一切ないのである。これは快感である!!

そして、木管楽器にスピーカーのセンターを明け渡して太鼓のリズムが軽快にホールに響き渡り、タンバリンの打音が距離感をもって空中を飛んでくるとヴァイオリンがピッチカートを刻み始め、そのデリケートな余韻感が見事に木管楽器のステージ上で調和するからたまらない!!

大太鼓が連打される最後のパートでは前述の見事な低域がホールに低音のエコーだけを取り残してはまずい、と言わんばかりに見事に引き締めてフィニッシュさせる。オーケストラの各楽器の余韻感に統一感を持たせることがいかに大切かを MOSQUITO NEO は私に“楽しく”教えてくれるのだから頭が下がってしまう。

「カルメン」10. アラゴネーズでは冒頭のお馴染みの主題が爽快地に演じられた後、中央ではオーボエとフルート、そしてタンバリンが軽快に絡み合い、それをヴァイオリンのピッチカートが包み込む展開が続く。その中でアルコに転じた弦楽器がなんと美しいことか!! 新しい録音とは言えないが通常の CD に含まれる情報量をことごとくピックアップしている P-0s を主力としたコンポーネントの面目躍如たるどころであり、アンプとケーブルという伝送経路

の実力に舌を巻き、そして MOSQUITO NEO の美しく引き締まった肢体を惚れ惚れと“耳”にする快感が続く。

さて、次は…!?

15. ハバネラ では冒頭からトライアングルとタンバリンのリズムが弦楽のアルコの隙間から奥行き感をもって響き、その距離感 Nautilus のそれを上回るかのような錯覚さえ引き起こす。どうして MOSQUITO NEO はこんなにステージの奥まで視野を広げ、かつ遠近感の表現において抜群のセンスを持っているのだろうか?

それはトゥイーターのハウジングのデザインにあるのだろうと私は考えた。

私は Nautilus やそのシリーズ製品の関しての解説で球面波をきれいに拡散することがいかに音場感に貢献するかと言うことを繰り返し述べて来たものだが、その球面波を生成するにはユニット自身の周囲に反射面があってはいけないのである。それが Nautilus のデザインの根拠にもなっているのだが、MOSQUITO NEO では写真を見てお解りのようにトゥイーターは空間にポンと独立する形でデザインされており、余分なバッフル面を持っていないのである。

大方のスピーカーはトゥイーターも面積がある平面に取り付けているものだが、そのトゥイーター回りの反射面がユニット後方への球面波の拡散にストップをかけてしまっているものと私は考えている。そして、MOSQUITO のエンジニアたちもそれに気が付いているのであろう。

やはりトゥイーターを限りなく小さい取り付け面積で設計することが音場感の再現性に大きく関与しているということを具現化したのである。

「もし私がスピーカーをデザインしたら絶対に同じことになるな～」

と自説を思い浮かべながら演奏が進み、感極まったという例のところではフォルテが発散される。この楽員が一斉に放射するエネルギーが空間を伝わってくる過程でどれだけ原型を留めるのか。

この原型とは各楽器の立ち上がりと消滅という時間軸に対する位相のあり方とご理解頂きたい。それがきちんとそろっていないと、どこかで強調された残響だけが残り、そのせいで他の楽音も“迫力に見間違ふ”ことのある荒さが付加される。

しかし、MOSQUITO NEO に関しては、そんな心配はなかった。指揮者のタクトの動きがもしもスピーカーの余韻成分を一刀両断にすぱっと切り裂き、これ以上の響きを出すなど指示したように、伸びる余韻はそのままで空中を滑らせ、一部の楽音だけが垂れ流すスコアにならぬエコーをピタリと制止するのである。設計の古いスピーカーには出来ない芸当であるが、MOSQUITO NEO はこともなげにタクトの動きを音にしている。

つややかな弦楽器の質感に包まれながら、しかし切れ味を失わないというオーケストラを私は本当に楽しむことが出来た。スタジオ録音に付いても稀に見る魅力を発揮している MOSQUITO NEO であるが、やはりオーケストラという醍醐味に私を導いてくれた MOSQUITO NEO に、私は近代稀に見る情熱で一目惚れしてしまったようだ。

サンプルとして語ったオーケストラの演奏は一つだけだが、実は時間のある限り何曲も続けてオーケストラを聴きまくったものだった。ただ、他の曲での私の印象を語り続けると終

わらなくなってしまうので、Nautilus での演奏で聞き込んでおり、最も比較対照に記憶の新しい選曲としたものだ。

さあ、MOSQUITO NEO はここに来られた人たちにどのくらい気に入っていただけるであろうか?

その確立を予測するのも私のビジネスの根本でもあるのだが、それは私の自信によっても大きく左右されるものだ。

最後に MOSQUITO NEO は私に大いなる自信を与えてくれたことに感謝している。

ここで MOSQUITO NEO を聴かれた皆様のお顔に至福の表情が表れることを私は 90% という確立で見ている。さあ、皆様はその中の一割でしょうか?

それとも…!?

第三部「磨けば光る潜在能力の物凄さ!! 更に引き出された NEO の魅力!!」

1. ESOTERIC と “NEO” の調和

素晴らしいコンポーネントを手にする、そのパフォーマンスに更に磨きをかけてみたくなるのは、ちょうど料理人が新鮮であり貴重な高級食材を手に入れたときの心境と同じであろう。

2004 年 4 月に私がめぐり合った数年に一度という惚れ込みようの “NEO” に更に美しいメイクを、更に気品ある衣装を、そして淑女としてのたしなみを与え、大人の魅力として複数の表情を持つ美女に仕立ててみたくなるものである。

しかし、そこに私が要求するのは外観だけの成長ではなく、健康的であり美しくしなやかな肢体の内側には、強靱であり機敏な反応を示す筋力も同時に身に着けさせたいものだ。

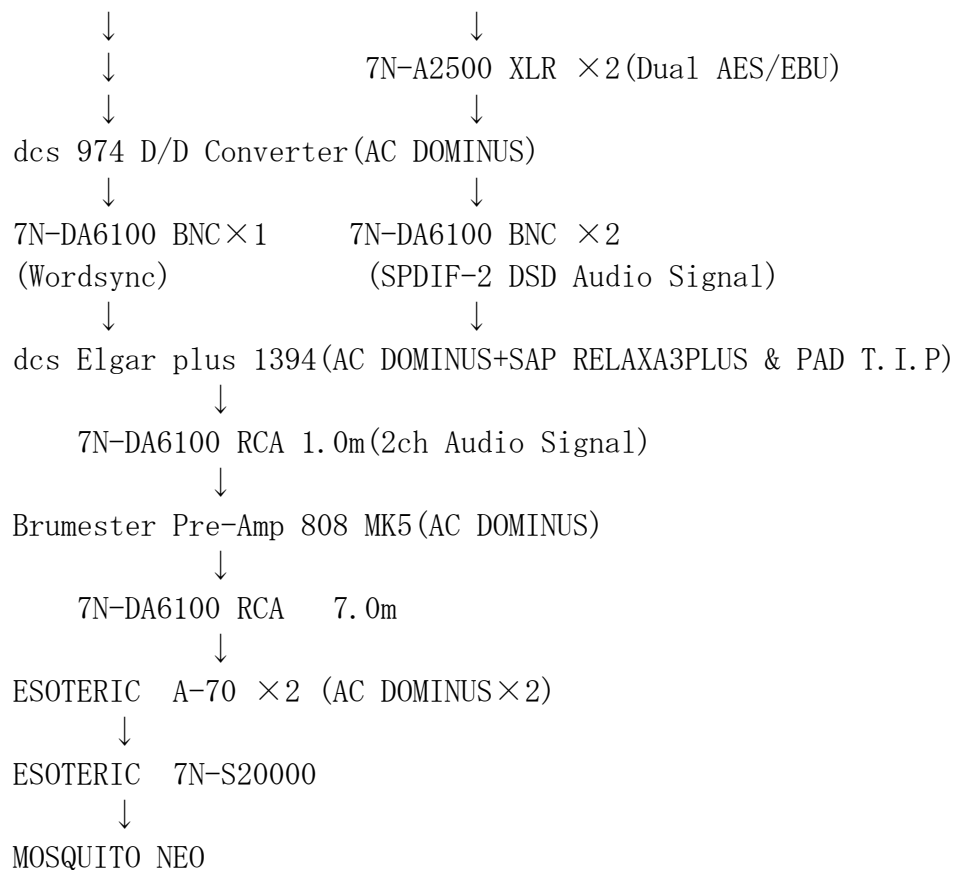
それを追求するいったんとしてこの教訓が私の脳裏をよぎった!!

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/279.html>

そう、まずはシグナルパスのケーブルを一つの思想のもとに統一し、フロントエンドからの情報量のひとしずくも取りこぼさないようにと、前回は一部分が他のケーブルであったが、今日はすべてを “MEXCEL Cable” とし次のセッティングに切り替えてじっくりと聴き込んでみたのである。そうしたら…!?

--今回のリファレンスシステム-***-***-

ESOTERIC G-0s (AC DOMINUS)	
↓	↓
↓	7N-DA6100 BNC (Wordsync)
↓	↓
7N-DA6100 BNC (Wordsync)	ESOTERIC P-0s+VUK-P0 (AC/DC DOMINUS & RK-P0 & MEI Z-BOARD & PAD T. I. P)



--***-***-***-***-***-***-***-***

まずはケーブルとパワーアンプの変化を確認しなければと、聴きなれている曲からということで押尾コータロー『STARTING POINT』6.Merry Christmas Mr.Lawrence をかけた。
<http://www.toshiba-emi.co.jp/oshio/>

これがいけなかった!! こんな音を聴くべきではなかったのだ!!

「え〜、このエコー感は何に? なんだというんだこれは!!」

良くある例えで、頭をがつんと叩かれたような衝撃と言われるが、まさにこのときの第一声を聴いた私はもろに頭をハンマーでがつ〜んと殴られた心境であった。そのせいでエコー感がいつまでも残っているのか(笑)

押尾の演奏も耳にタコと言えるほどに、時間の進行に伴って展開する演奏の端々までを記憶しているのだが、こんなに滞空時間の長い余韻感を眼前で見せられたのは初めてではないだろうか!!

ギターのガットが弾かれた瞬間から余韻が消え去る瞬間まで、まるでストップウォッチで測れるほどのエコーが“NEO”周辺の空気に漂っていくのである。しかも、それは難しい例えなのだが、テンションのある余韻感なのだ。響きの途中でゆるくなってしまい質感が変ることなく、ピーーン!! とリニアな減衰特性で時間の経過にきちんと反比例しながら消滅していくのだ!!

只者ではないぞ、これには参った!!

この検証はここでやめるわけにはいかない!!

2. 時間を滑っていくようなひと時

ESOTERIC A-70 は Nautilus システムに使用していたもので 24 時間通電を続けているものであり、本体の熱気は相当なものだ。当然バーンインは十分にこなしてある。そして、ここ数日演奏を繰り返していた 7N-S20000 の MEXCEL スピーカーケーブルもかなり熟してきたようだ。

<http://www.teac.co.jp/av/esoteric/mexcel/index.html>

しかし、システムの切り替えではその直後にすべてのパフォーマンスを引き出せるものではない。だが、この時は各々にバーンインした二つのシステムを中間でつなぎ合わせたのだが、まるで熟した果物を何種類もジューサーで絞り、ミックスしたら未体験の美味と香りが口の中にパッと広がったごとの調和を見せていたのである。何も疑いはなく、ただおいしい、とろけるほどおいしいのである!!

次に 12. HARD RAIN にスキップした。この曲の低弦とリズムは独特の重量感をかもし出しているのだが、ここでも驚きの発見があった!!

「なんと!! 低音の余韻ってこんなに出ていたんだ!!」

MOSQUITO NEO の低域は早い!! しかし、それは楽音そのものが発生した瞬間と、録音中の楽音がなくなったときに追従するブレーキ感の両方がハイスピードでなければいけないものだ。つまり、スピーカーが低域のエネルギーを溜め込んで、時間経過とともに質感を変えながら小出しにしていくということはあってはいけないのである。

そんな、スピーカーによる低域成分の貯蓄効果? がまったくくないものを聴いた時に、皆さんはどのように思われるだろうか?

連続する低域のエネルギッシュな演奏こそ、スピーカーの本性的に見えてくるものである。言うなれば、録音に入っていない低音をスピーカーの個性、演出効果としてどうしても付け足してしまうものが多いものだ。

それらを引き算した音を私はこれまで多数経験してきたのだが“NEO”の低域はまさに“すっぴん美人”そのものなのである。6. Merry Christmas Mr. Lawrence で見られた高域のエコー感の素晴らしさ、実はそれは高域だけでなく低域にこそ、その真髄とも言えるパフォーマンスがあったのである。

再生する低域周波数に関係なく、楽音の発祥と消滅が正確に捉えられるということは低音の余韻感が見えてくるということなのだ。つまり、きちっとブレーキがかかるウーファーを有するスピーカーは、低音のインパルス応答が素晴らしく、そしてそれが消えていく過程のエコー感の描写力を究極的に高めているのである。

そして、ここでふと思いだった!!

「そうだ!! “MEXCEL Cable” のパフォーマンスがこれなんだ!!」

--***-***-***-***-***

ケーブルが伝送過程で失ってしまうものがある。しかし、失ってしまった情報は音楽のバランスを変質させるので、何かを付け足したような印象をうけるものだろう。

相対的に高域の伝送状態が損なわれれば低域に量的な増加を感じるようなものである。そう、ケーブルの評価では消去法によって音質変化を感じるものであり、決してケーブルが余韻感や楽音のテンション、質感という情報を付加させるということはないものだ。今ここで感じられたことは正にすべての経路を“MEXCEL Cable”で統一したことによって“NEO”が敏感に反応したということに他ならないのだ。そして、ここにA-70という存在感に新たな光が当たってきたことを私は実感したものだ。

低域の絶妙なコントロールに舌を巻いた後で、多用な楽器が背景を埋めてヴォーカルも同時にチェックできるものをと「Muse」からフィリップ・ジョルダーノ 1. ハバネラをかけることにした。http://www.universal-music.co.jp/classics/healing_menu.html

「なんと、このヴォーカルとバックコーラスの分離感と質感は!!」

押尾のギターのエコー感がいかに“NEO”の周囲にオーラを発したかという驚きが記憶に新しい一瞬に、フィリップの声にこれほどの滑らかさと潤いを同時に感嘆ことはなかっただろうという私に第二の衝撃波が襲った。

ピーン!! と弾かれ引き伸ばされるギターの余韻感とは違い、複雑な声質の表現に当たって、発声後に閉じられる口元と再度唇が開かれてビブラートを繰り返すフィリップに惚れ惚れと見とれてしまうような数秒間を“NEO”は提供してくれた。

あ〜、この質感をお聴かせしたい!!

そして、例のドラムがセンターに響く!!

「あ〜、叩いた瞬間が見えた!!」

前述のように“NEO”が生み出す低域は大編成のオーケストラとヴォーカルを背後に並べた録音に対して、ごく低い周波数で繰り返されるドラムをぽっかりと“NEO”のセンターに浮かび上がらせるではないか。

一部のスピーカーのように床の上に低音だけが急降下して、這うように足元に押し寄せてくる低域の表現ではないのだ。ヴォーカルやオーケストラが並ぶステージに皆が並んで演奏しているという目視を可能にした見事な配列が“NEO”と ESOTERIC によっていとも簡単に実現してしまった。

-*-*-*-*-*-*-*-*-*-

女性ヴォーカルを快感と愉悦のうちに聴かせる“NEO”を惚れ惚れと眺め、それでは定番の選曲を私の脳が要求した。大貫妙子の“attraction”から5トラック目ご存知の「四季」である。http://www.toshiba-emi.co.jp/onuki/disco/index_j.htm

「おお!! 見える見える!!」

ギターとウッドベースが左右で展開するお馴染みのイントロ。その次に登場した大貫妙子のヴォーカルが“NEO”の頭頂部のわずかに上の空間に表れたとき、私は喜び100%に驚き100%を同時に味わうことになった。

まるで大貫妙子の背後に反射板を屏風のごとく並べて、彼女の発するセンテンスの終わりの息遣いに至るまでをもったいないと響かせてくれるような豊潤なエコー感がそこに見えるのである。

“NEO”の類稀な広々とした空間というキャンバスに MEXCEL Cable と A-70 が霧吹きで潤いをスプレーし、新緑の木々に宿るみどりの葉の一枚一枚にしづくがたれるように色彩感を見事に再生するのである。乾燥した葉が鮮やかに蘇るようなエコー感に包まれて、この曲のサビで背後を飾る弦楽器の音色もなんと美しいことか!!

私の記憶する大貫妙子の演奏に対して最優秀歌唱“再現”賞がこの時に確実となった。

3. スケール感を司るものとは?

女性ヴォーカルを主軸として展開されるテスト曲で“NEO”の魅力を引き出したパートナーの存在感をつくづく実感していくうちに、その広大な空間表現を男性ヴォーカルでも確認しなくてはと次なる選曲である。

オーケストラと合唱を背後に従えた録音の RUSSELL WATSON である。

<http://www.universal-music.co.jp/classics/watson/index.htm>

まず『The Voice』から 1. Nella Fantasia

イントロが始まったところで、フィリッパのハバネラで認知されたステージ感としての水平方向に統一された位置関係と両翼への音場感の広がりもここでも真っ先に私を捕らえた。この音場感の広さと背景に並ぶオーケストラ、そしてコーラスとの奥行き感は何んということだろうか!!

そして、ここでもハバネラの時のようにグランカッサを静かに叩いてごく低い周波数でのリズムが時折繰り返されるのだが、その響きの残存性がなんと高いことか。ここでも低域でのエコー感という“NEO”の魅力を再度確認させられることになった。

「試しに音量を絞ってみるか!? ……えっ!!」

最低域の響きの消滅までが見える。WATSON のヴォーカルの口元のサイズはもちろん小さくなるのだが、エコー感のあり方は現状維持を続ける!!

こんなことってあるのか?

続いて 12. Funiculi - funicla

背後のオーケストラもそうだが、バックコーラスの広がりや各パートの距離感、そして演奏される空間を物差しで測り、そのまま音量を下げる。

「あ〜、さっきと同じ間隔で音源が並んでいるじゃないか!!」

にぎやかな曲をボリュームを絞って聴いてみたら、これまでのチェック項目で“NEO”と ESOTERIC のコンビが獲得したポイントがそのまま生き続けているのだから呆れてしまう。

本当か!?

14. 誰も寝てはならぬ Nessun dorma!

導入部からの合唱が Nessun dorma の主題を繰り返しアレンジの上手さが光る。こらえつつも次第に盛り上がる中で RUSSELL WATSON の声量がステージを埋め尽くすように展開し、パロッティのオハコをドラマチックに自分のものとして歌い上げていく。そして、ここでも音量を下げて聴きなおした。

「そうそう、望遠レンズのズームを回して引いたときのようだ!!」

“NEO” は忠実にヴォーカルとオーケストラの全景を自分の周囲に描き出し相当なボリュームでもストレスを感じさせることなく聴かせるのだが、その耳に心地良いフォルテの表現をズームアップと例えるならば、この時にステージがスーッと遠ざかっていく音量の絞込みはクローズアップから

広角へと視野を広げていくイメージにドンぴしゃりなのである。

音量の増大に伴う音像の拡大はあるだろう。

しかし、音量を絞り込んでいっても音場感が維持されるというのは何とありがたいことか!!

オーディオにおけるスケール感やはり相応の音量で求められるものというのが一般的なものだが、MEXCEL Cable と A-70 がサポートしたときの“NEO” はスケール感という概念に新しいページを開いたのである。

「これって…、音量を下げてても空間表現の大きさは変わらないじゃない!!」

度々述べてきた余韻の存続性、ケーブルによる情報量の維持、それらが総合的に“再生音量のピアニッシモ” でスケール感の縮小という比例関係を否定したのである。

これは素晴らしい!!

4. “NEO” 流? オーケストラの楽しみ方

最近ちょっぴりご無沙汰していた選曲でゲルギエフとサンクトペテルブルク・キーロフ管弦楽団・合唱団「くるみ割り人形」でチェックすることにした。

http://www.universal-music.co.jp/classics/gergiev/valery_gergiev.htm

数あるオーケストラの録音でも、この「くるみ割り人形」では指揮者とプロデューサーのセンスなのか大変解像度の高い録音であるということは以前から承知していた。しかし、一歩間違えると弦楽器と金管楽器の演奏にはアルミの粉末を刷り込んだようなきらめきが見えてしまうことがあるのをお気付きだろうか?

先日私が聴き惚れたセミヨン・ビシュコフ指揮、パリ管弦楽団によるビゼー「アルルの女」 「カルメン」 (PHCP-5276 廃盤) ではとにかく弦楽器のしなやかさ、美しさに心奪われたものだが、これとは録音の感性が違ふとしか言いようがない。そして、それを上手く鳴らすことに私はここでのチューニングの方向性を見出していたものなのである。

1. 序曲が始まった。

「おお!! ホールエコーがいい!!」

たちどころに私の期待感が現実の物となって滑り出していく喜びがある。トライアングルの音色は本当にソフトドーム・トゥーターなのかと耳を疑うほどに鮮明であり、弦楽器群が発するエコーがホールの天井と壁に反射して手元に届くように情報量が多い。

15. 「中国の踊り」

「ファゴットのエコーが長いぞ。ヴァイオリンのピッチカートがいいぞ!!」

そう、低い音階での余韻感が高音楽器のそれと同レベルで展開し存続しているの、ゆったりとしたホールの奥行き感を“NEO”が聴かせる。そして、ピッコロ、フルートの痛烈とも言える演奏が、吹き込む息の強さはあれど決して刺激成分を含まないのである。これは聴きやすい。

16. 「トレパーク」

猛烈な勢いでアルコを切り返す弦楽器群に対してパーカッションが背後から強烈な打音を響かせる。しかし、今までと違う弦楽器の質感に躊躇しつつ、自然と指がリズムを刻み始める。

「あれ、私はもしかしたら緊張していないのでは!？」

そう、この曲をじっと正視して各パートの挙動をチェックしようと習慣付いていた私は、前述の“アルミの粉末を刷り込んだようなきらめき”がどの瞬間に目にとまるのかを身構えて聴いてきたのだった。

ところが、“NEO”ときたら役者が違うと言わんばかりに、今までのスピーカーはオーバーアクションだったのよ!! と私に無言のアピールをするのである。確かに、関節炎を患ったバレリーナが踊るようなぎこちなさは皆無であり、オーケストラの楽員すべての体に天然成分のオイルが注入されたように演奏の滑らかさが引き立つのである。これはいい!!

「そうか!! どうして“NEO”でオーケストラが聴きたくなるのかわかったぞ!!」

解像度の極みというのは、万年筆のペン先がいかにか細い線を引くことができるかという楽音の輪郭、ディティールとして色彩を区分けする境界線を強調することではないということなのだ。

むしろ境界線が引かれているということを聴き手に悟らせずに、輪郭の中身に見られる産毛の毛羽立ちのような肌触りを私たちに感じさせることなのだ!! その感触を指と耳で私が楽しんでいるから、オーケストラに“癒し効果”とも言える興奮をともなう安らぎを感じるのだ!!

MEXCEL Cable と A-70 は、楽音の産毛とも言える微細な情報をスピーカーまで確実に伝えていくということ、そして“NEO”は微風に反応してマイクロのさざ波を起こしている音の産毛がボディーを包み込んでいるスピーカーなのだ!!

スピーカーの能力が中立性、高忠実度という視点において、そこに至るプロセスの変化を微妙に、そして確実に聴き手に伝える。オーディオとはコンポーネント全体の連鎖によるパフォーマンスであると私は常々実感しているものだが、世界的にも希少価値な実演がここに実現した。

ストレスフリーという言葉を実感するには“NEO”が最適である。
試聴の時間は30秒でも3時間でもいいでしょう!!

一度口にした美味を人間は生涯忘れることがないのでから…!!

第四部「NEOによって融合されるコンポーネントの潜在能力!!」

一流の料理人とは一般の人々と何が違うのだろうか? 手先が器用、目がいい、舌が肥えている、頭がいい?(笑) 身体的な能力が優れているからというわけではないのです。舌がいい…、と言っても味を分析するには舌は単なるセンサーであり、味覚という信号を受信した脳がいかにかそれを評価することができるかが重要なのです。私が思うには、出来上がった料理の味がわかるということだと思います。では、わかるということはどういうことか?

以前テレビを見ていて大変印象に残ったことがあります。香水の産地? で有名なフランスでは国立の調香師を育成する学校があるそうです。確か生徒数は600? か1,600人ということでした。毎年の卒業生はその中でも5~6人という厳しい基準があるそうです。

香水の原料となる個々の香りの種類は1,500種ほどがあり、それらをすべて嗅ぎわけて記憶しないといけないそうです。そして、結果としてはある香りを嗅いで成分を分析できるように、逆に数種の成分を混ぜ合わせた場合の仕上がりの香りを特定できなくてはならないそうです。

私から見れば神業と思えるような超人的な嗅覚と記憶力なのですが、確かにプロフェッショナルの世界とはそういうものなのでしょう。

毎年いくつかの新種は開発されるのですが、自然界に存在する香りの材料というのはある意味有限と言えるかもしれません。しかし、その組み合わせによる新種の創造という無限かもしれません。

さて、私の仕事で取り扱う製品数はコンポーネントとしても、工業製品という背景からしても、上記のように一千種類以上などという数には及びません。従って、記憶することに関しては多少楽かもしれませんが、香りのように結果を物理的に固定化・安定化することは中々難しいものです。

そして、何よりも時間経過に伴って新しいものがどんどん開発されてくるという特徴もあります。しかも、それらの組み合わせは膨大なパターンになり、更にそれらのパフォーマンスを持ち運べるような“固定化・安定化”ができないという性質があります。

このような背景の聴覚の世界でプロフェッショナルには何が要求されるのか?

「オーディオなんて所詮その場限りの曖昧なものだから…」という概念に必死のアンチテーゼを試みた数日間のインプレッションをやっとまとめることが出来ました。

狙った音を組み立てる…。簡単なようで難しいことであり、香水のように瓶に詰めて皆様にお届けできないものです。しかし、その間違いなく私の作り上げたものを食して頂ければ皆様の感性でもお解りいただけます。

今回の最後に述べている一言、“試食”とは何を意味しているのか？
ぜひご一読頂ければと思います。<m()m>

1. こだわりの極み

素晴らしいコンポーネントを手にする、そのパフォーマンスに更に磨きをかけてみたくなるのは、ちょうど料理人が新鮮であり貴重な高級食材を手に入れたときの心境と同じであろう。

2004年4月に私がめぐり合った数年に一度という惚れ込みようの“NEO”に更に美しいメイクを、更に気品ある衣装を、そして淑女としてのたしなみを与え、大人の魅力として複数の表情を持つ美女に仕立ててみたくなるものである。

しかし、そこに私が要求するのは外観だけの成長ではなく、健康的であり美しくしなやかな肢体の内側には、強靱であり機敏な反応を示す筋力も同時に身に着けさせたいものだ。

先日も巻頭言として述べた一説であるが、その思いはH. A. L.のリファレンスとして定着した“NEO”を核にして更に素晴らしい音質を目指す私の欲求とこだわりという飽くなき追求の姿勢はとどまるところを知らない。

偏執狂というところまで自分を追い込むようなことはないし、ましてやオーディオと再生音楽についてミクロの視点を持ち過ぎることの弊害を承知しており、楽しむための音楽という見方をしている私だが、妥協した音質をここで出したくないというこだわりの気持ちには揺るぎがない。

そんな私の元に先週持ち込まれたのがこれ。

TECHNICAL BRAIN Monaural Power Amplifier TBP-Zero 税別¥2,800,000.

この作者である同社の黒沢直登氏は20年ほど前から存じ上げている方なのだが、このような作品を手がけていたとは知らなかった。ご自身では営業経験などなかった同氏が私を訪ねて来られた理由はここで述べるまでもないことだろう。根っからの技術者である黒沢氏の作品に対して私がハード的な解説をするなどおこがましいものであり、TBP-Zeroに関することは下記のサイトや技術系オーディオ専門誌をご覧頂ければと考えている。

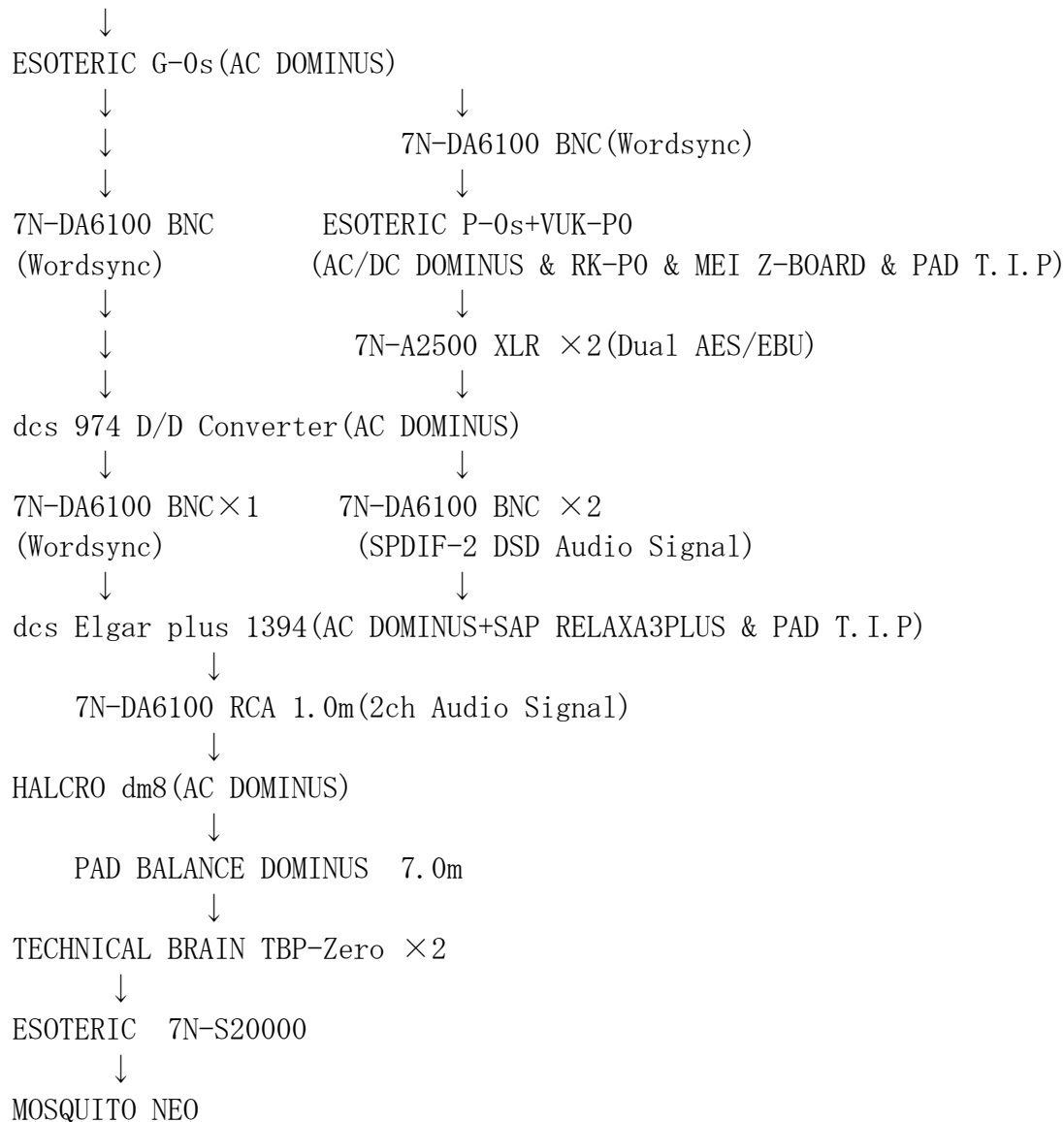
さて、持ち込まれた当日は最近定番としてセッティングしている下記のシステムに組み込むことになった。

-*-*-*-当日のリファレンスシステム-*-*-*--

Symmetricom's Cesium Frequency Standard 3 (RELAXA2+)

↓

7N-DA6100 BNC



~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*

早速聴いてみたのがこれ。セミヨン・ビシュコフ指揮、パリ管弦楽団によるビゼー「アルルの女」「カルメン」の両組曲である。(PHCP-5276 廃盤)弦楽器を中心としてオーケストラの各要素を満遍なくちりばめた演奏で最近はこの聴くことで私は多くのことを知ることが出来るようになったものだ。

1. 前奏曲 「お～、電源投入直後なのに中々いいじゃないか!!」
8. ファランドール 「管楽器の豪快さと弦楽器群の質感がいいぞ!!」
10. アラゴネーズ 「打楽器のエコー感がホールでの位置関係を忠実に再現」
15. ハバネラ 「フォルテの開放感が気持ちいいな～!!」

と、第一印象は設計者ご本人が同席されていてアンプも鳴らし始めたばかりというハンディキャップ? もあったが好感触であった。しかし、同社ではプリアンプは開発中ということで純正のペアはない。プロトモデルも持ち込まれたが上記の HALCRO の方が魅力的に感じられたものだった。

しかし…!?

24 時間通電を続けながら、二日後に時間を見つけて再度同様なシステムで聴き直すことにした。同じ曲を聴き始めたのだが、第一印象ほどの魅力が感じられない。

私は常々プリアンプとパワーアンプは同一の作者によるペアが最も本領を発揮するという信条を持っているものだが、その疑念が再び頭をもたげ始めたのである。過去にも同様にプリアンプだけ、パワーアンプだけという単体を他社の製品と組み合わせたことは数え切れないほどの経験がある。

いずれか単体で最初持ち込まれたアンプを試聴し、どうしても不満がある場合には同メーカーのプリアンプ、またはパワーアンプがあった場合には後日でも持ち込んで頂き再度同じアンプを同メーカーの組み合わせで聴くと私の不満が解消されるという経験が多々あったものだ。

しかし、今回の場合には同メーカーのプリアンプがないということを前提に評価しなければならない。

これはあくまでも私がこの試聴環境とシステム構成の中で検証し、私の感性による判定ということになるのだが、初日に組み合わせた HALCRO では既に違和感を感じ始めていたのである。そこで、上記システムでプリアンプのみを Brumester 808 MK5 に入れ替えたのである。しかし…!?

私はオーケストラの演奏で弦楽器の再現性がつつがなく行われることが第一条件であり、金管楽器や打楽器などの質感はその後の調整か、もしくは個性の選択という範囲でも受け入れられる要素として優先順位を先ずは弦楽器において仕上げていくことにしている。

これまでには HALCRO dm8 も Brumester 808 MK5 も、過去のシステム構成においては私が満足する質感をシステム全体にもたらしてくれていたのだが、今回はどうしても納得がいかないのである。

このパリ管弦楽団の録音では弦楽器の各パートが幾層ものレイヤーとして同質の光沢感をもってしなやかに展開して欲しいものなのだが、残念ながら単体としては素晴らしいプリアンプであることを他の場面で実証してきた両者も今回は私の求める質感を出してはくれなかったのである。

これはもはや“個”の問題ではなかろう、と私は三日間の時間をおいて結論を下し、自分の記憶にあるコンポーネントの適合性を推測し大きくシステムを変更することにしたのである。

そう、弦楽器にこだわった。

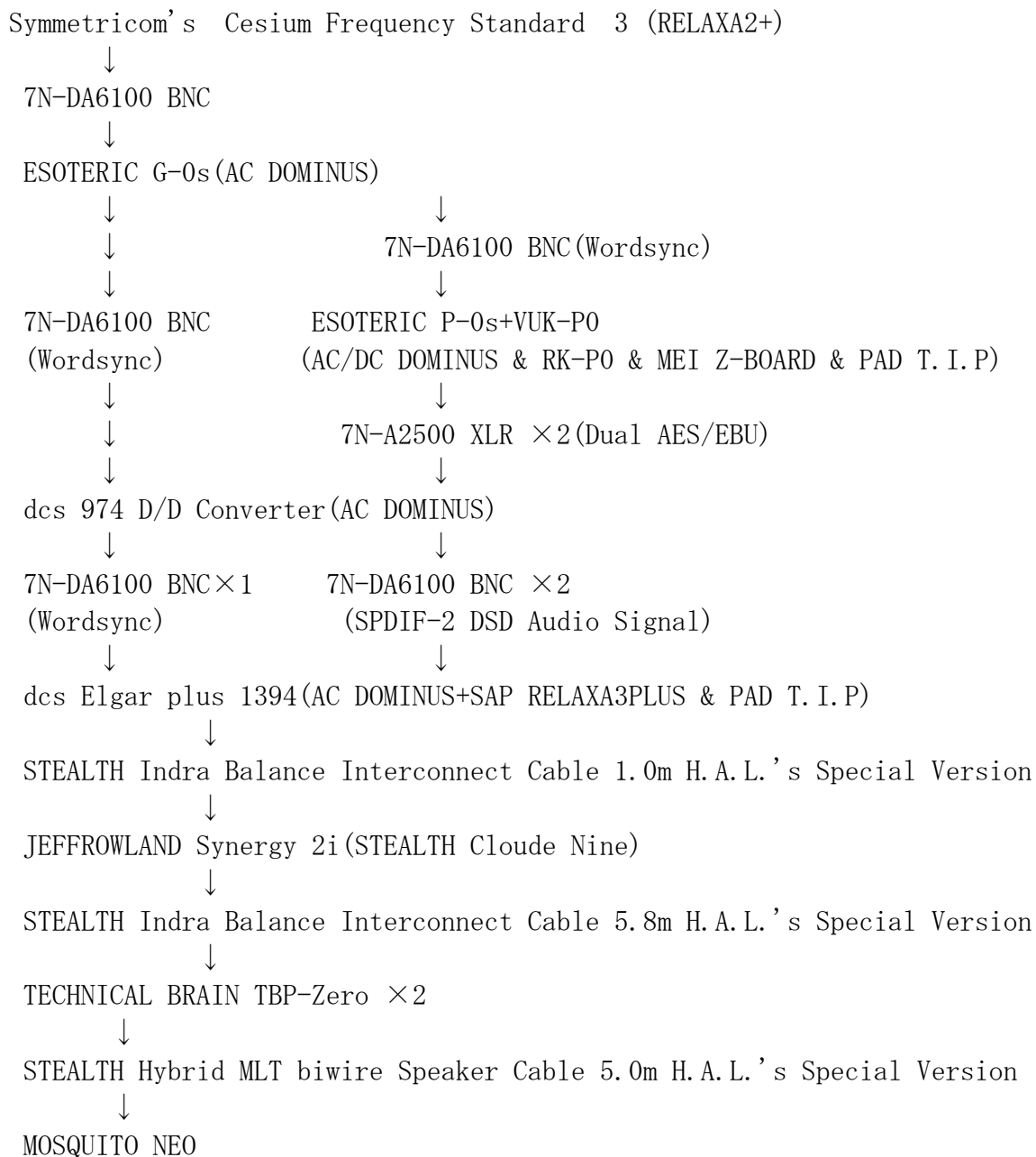
2. ケーブルはコンポーネントの一部である

私は持ち込まれた各社の作品を可能な限り追い込んで鳴らしてみたいと願っているもので、組み合わせの妙という意外性を何回も経験してきた。TBP-Zero という新入生に対しても同期のプリアンプがないからという理由だけで中途半端な結論は出たくない。

しかし、そこにはシステムのなかで噛み合う歯車として他の要素はないだろうか? と考え

込んでいた私は第二のシステム構成としてケーブルの相性にも目を向けることにし、以前の経験から下記の Short Essay で検証した STEALTH Audio Cables の美的余韻感を取り入れてみることにした。

-*-*-*-第二のリファレンスシステム*-*-*-*-



-*-*-*-*-*-*-*-*-*-

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/278.html>

まず、Indra に関しては上記のブリーフニュースで詳細を述べているが、最大の特徴はアモルファス状態で直径 0.025mm の素線を 9 本をコアに仕込んでいるのが Indra であり、特徴は「Q ファクター」と呼ばれる要素である。同要素はケーブルの信号号伝送の際に生じるリングングを防止する効果がある。リングングとは急峻な変化をする信号が、回路網を通過した際に生じる波形を言い「ディストリビューテッド・リッツ」という無共振多層構造を採用して

いる。今回はバランスケーブルでは二倍の 18 本が使用されている。

私は以前の試聴評価の好印象に加えて更なる可能性を追求するという事で STEALTH から提案があったのだが、直径 0.025mm の素線の本数を増加させることによって更に低域の再現性を向上できるので、これをオリジナル商品としてミスター・カワマタに提供しようということだったのである。

そして、届けられたのが 0.025mm の素線を 12 本組、バランスケーブルなので一つのケーブルには 24 本を組み込んだ、この Special Version の Indra であり、DYNAMICAUDIO105555 HI-END AUDIO LABORATORY とレタリングされてきたのである。これはうれしい!! 更にノーマル Indra に比べて多量のシールド、テフロンが施されており、プラグはチタニウム製で非常に堅牢である。

しかし、精度と音質にこだわる設計から私はここで使用する長さとして 7.0 メートルの Special Indra をお願いしていたのだが、製造上の限界から 5.8 メートルまでしか出来ないのので許して欲しいというメールを頂いてしまった。

それはもちろん理解できるというか、0.025mm の髪の毛よりも細かいアモルファスの線を 5.8 メートルもの長さでより合わせてケーブルを作っていくのだから、逆に恐縮してしまうような手間ひまとノウハウに支えられていたことだろう。

これでプリとパワーアンプの接続は出来るが、プリアンプへの入力はどうするのか? という事まで気を使って頂き、一昨日 Special Indra の 1.0 メートルも到着したのであった。これでシグナルパスを Special Indra で統一できるぞ!!

-*-*-*-*-*-*-*-*-*-

次にスピーカーケーブルであるが、Hybrid MLT biwire Speaker Cable ということで、これもオリジナル商品として提供されたものだ。どこが違うのか?

まず、この Hybrid MLT が非常にユニークなところは、シングルワイヤーの場合には“Low”専用ケーブルが 2 本、“High”専用ケーブルが 2 本の計 4 本が 1 セットになって販売されるということなのである。

つまり、片チャンネルのスピーカーには“Low”と“High”の各々をプラスマイナスに接続して使用せよ、ということなのである。そして、“Low”をスピーカーの入力端子のプラス側にするかマイナス側にするのかはユーザーの好みで、“High”も同様にどちらに接続するかをユーザーに任せて好みで使って欲しいということなのである。ちなみに、私は biwire で依頼したらこれの二倍、つまり左右で 8 本、“Low”と“High”が各々 4 本ずつ納品されてきたのである。さあ、この使いこなしも課題の一つになってしまった(^_^)

これについて輸入元の見解は次のように伝えられている。

接続方法には以下に示す 3 通りがある (バイ・アンプ、バイ・ワイヤーの場合)

1. Left と Right のスピーカーへそれぞれ 2 本の“High”を mid/high セクションへ。
“Low”を bass ドライバーへ接続します。音質の傾向はより臨場感が得られます。

2. Left と Right のスピーカーへそれぞれ 2 本の “Low” を mid/high セクションへ。
“High” を bass へ接続します。音質は bass にスピードが増し、深いサンドステージと全体感が柔らかくなります。

3. Left と Right のスピーカーへそれぞれ 1 本の “High” と 1 本の “Low” を bass に使用し、1 本の “High” と 1 本の “Low” を mid/high セクションに繋がります。
結果スピーカーの mid/high と bass セクションが明かな “Even” (同一特性) を引き出します。

次に、内部の構造なのだが、最小単位としての素線は Indra 同様に極めて細いワイヤーであり、それも同様にテフロンで一本ずつを絶縁している。ポイントはこの素線の素材なのだが、純度 99.997% の純金、純銀、OFC の導体を使用している。三次元 43 層絶縁 TATC マルチゲージ構造というのは、この三種類の素線がある単位にまとめられたものをより合わせているということであり、各素材のケーブルが多数使用されているということだ。

さて、それでは Special Version と何か? という事なのだが、上記のように三種類の素材の素線が組み込まれているのだが、特別に「Fine Tuning」されており “High” の金と銀が 25% 増量されており、“Low” の銅が 30% 増量になっているという。

最後に価格なのだが、次のような対比となる。

通常の Indra は下記のように仕様によって異なるのだが 1.0m として示すと…

Indra Amorphous Alloy RCA WBT 0110Ag	税別¥748,000.
Indra Amorphous Alloy XLR Furutech FP-600 Rh	税別¥975,000.

これに対してプラグも特別仕様となり

Indra Balance Interconnect Cable 1.0m H.A.L.'s Special Version 税別¥1,268,000. という価格になるものだ。ここに来ているのは 5.8m なのだが、これだと ¥3,936,800 (Stealth Rh) という価格になる。

次にスピーカーケーブルだが、3.0m としてシングルワイヤーでは New Generation Hybrid MLT Stealth Spade Ag はステルスオリジナルのスパードプラグを使用しており純ソリッドシルバーを採用し、優れた絶縁特性を持つ音質プラグを使用している。税別¥403,000.

それに対して

Hybrid MLT Speaker Cable 3.0m H.A.L.'s Special Version
税別¥557,000 (WBT0660Ag) という価格になるものだ。

これが biwire 仕様になると税別¥999,000. という価格になる。ちなみに、ここに来ているのは 5.0m の biwire なので税別¥1,711,000. (WBT0660Ag) となる。

最近のニュースとして Stealth Indra が「2004 Most Wanted Components」を受賞しニューヨーク STEREO TIMES 誌の記事として一報が入っている。

<http://www.stereotimes.com/MWC0511044.shtm>

さあ、これらのケーブルを接続し PAD のシステムエンハンサーを一晩かけて明日の試聴に望もうということになった。二機種の高価なプリアンプをやめて JEFFROWLAND Synergy 2i を採用したことも含めて明日はどのような演奏を聞かせてくれるのだろうか!?

3. 興奮のリニューアル

まず、私が最初にこだわったのは Hybrid MLT Speaker Cable の使いこなしである。“NEO”はシングルワイヤーでの接続なので、この場合にはバイワイヤーの両チャンネルで 8 本というケーブルをすべて使う必要はないのであるが、根が貧乏性の私(笑)なので、もったいないと思いついて上記の“Low”と“High”のケーブル二本をアンプとスピーカーのバイインディングポストひとつに何とか接続して聴いてみようと思ったのである。

PAD DOMINUS のスピーカーケーブルは、プラスとマイナスでは導体の構造と合金の配合も違うということは承知しているものだが、あからさまに“Low”“High”とケーブルに表記されていると低音専用? 高音専用? のように見えてしまって精神的に落ち着かない。ましてやスピーカーのプラスとマイナスの各々に“Low”“High”を一本ずつ使うというやり方にはなじみがない。

であれば、スピーカーのプラス、マイナスともに“Low”“High”をダブルで接続してしまえば文句はなかるう!!(笑) と思いついたものだ。その後に残された組み合わせは二通りである。それは、スピーカーとパワーアンプの接続でプラスに“Low”をつなぐかマイナスに“Low”をつなぐかということである。“High”は当然その都度逆になるわけだ。この 3 パターンを聴き比べたのである。

もったいないから…、ということで一つのターミナルにダブルで接続した場合が真っ先に選択肢から外れた。一見弦楽器がふくよかに感じられるのだが、音量を上げていくとごくわずかだがフォーカスののにじみが感じられる。

次に、プラスに“Low” マイナスに“High”、そしてその逆。う～ん、これは難しい…。しかし、確実に言えることは前回のダブルでの接続よりも音像がすっきりしていてフォーカスのイメージが整っていることだ。やはりシングルワイヤーではこのどちらかでいくべきだろう。“Low”“High”の接続を三回やり直し、極めて微妙ながら楽音の質感を聴きとって私が選択した接続法は…!?

今回のシステムにおいて、という条件付だが私が選択したのはマイナスに“Low” プラスに“High” という組み合わせであった。これがいい!!

—*—*—*—*—*—*—*—*—*—

さあ、これでいよいよ本格的に心置きなく試聴できる下地が出来た。さて…!?

これまでに引っかかっていた課題曲、セミヨン・ビシュコフ指揮、パリ管弦楽団によるビゼー「アルルの女」「カルメン」(PHCP-5276)を早速かけてみた。

[1]前奏曲 「こっ、これは!!」

導入部の弦楽器群による重厚なアルコの合奏のいきなりの変貌にわが耳を疑った。

私がこのディスクの中でも特に好きなパートであるが、この時の弦楽器が幾層にもレイヤーを構成して左右の“NEO”の更に両翼の周辺部までも広がり、その質感にほのかな甘みを感じさせてくれるのがたまらない。思わずイメージしたのは、あのミルフィーユであった(笑)ちょっとした雑学だが調べたところでは。

〈 millefeuille 〉 薄い生地が何層にも重なったパイ菓子。

日本では銀座マキシム・ド・パリの「ナポレオン・パイ」が有名。日本ではミルフィーユとして売られていますが、正確にはミルフィユ<millefeuille>と言います。ミルとは「千」、フィユとは「葉」、つまり「千枚の葉っぱ」という意味です。何層にも折り重なるパイ生地(実際にパイ生地という単語はなくフィユタージュと言います)を焼くと葉っぱが重なったようだとするところからこの名前が付けられました。製菓職人のルージェが作ったと言います。

ちなみにミルフィーユとミルフィユ、フランス語だと全く違う意味になってしまいます。ミルフィーユは「一千人の娘さん」という意味になるのです。正しい発音はミルフィユなのです。

この解説を読むまでもなく、甘党の皆様はどうにご存知の菓子なのだが、先日のようにTBP-Zeroを使い込んでいく過程で私が不満としていたことが見事に解消し、本当にドライブ能力のあるアンプとは、打撃音のようなものをカツカツ、バンバンと鳴らして驚くのではなく、楽音の本来あるべきしなやかさを再現したときに真の実力が問われるものだということが今ここで実証されたようだ。

弦楽器群の多数のアルコの繰り返しの中で大変微妙だがわずかに舌にざらっとする感触を覚えたものだが、この時の演奏は大違いだ。

視覚的にはまさに「千枚の葉っぱ」のごとく一本一本のヴァイオリンが重なり合った縞模様が鮮明に見えるようであり、その一つずつの層の間に塗り込められたクリームがえもいわれぬ口溶けのまろやかさで絶妙な甘さに至福のひと時を得た思いである。これは初めての体験である!! 美味しい!! こんな“NEO”があったとは!!

そうだ、“NEO”の輸入元のエリック氏はフランスの人なのでこの例えがわかってくれれば良いのだが…(^_^でも私は「一千人の娘さん」の方が好きだな～(大爆笑)

冗談はこの辺にして…^_^;

[8]ファランドール 「Shout bravo!!」

この演奏が終わったときの正直な私の感動である!! 前奏曲と同じ主題を管楽器を交えて始まり、やがてタンバリンと小太鼓がステージ奥でリズムを刻み始める。最初から豊潤な余韻感がオーケストラ全体に潤いを与えながら、リズム楽器の鮮明さが対照的に歯切れいい。

やがてフルートが中央で絶妙なタンギングを披露するとストリングスもピッチカートで応え始める。このピッチカートの最初は点としての音源からふわ～、とホールに響き渡る余韻感が聴きどころであり、まさに私の記憶に焼きついている STEALTH の最も印象的な魅力であることを思い出した。

終盤に差し掛かると弦楽器群のアルコがうねるように展開し、ことさらハイスピードな“NEO”の低域再生にTBP-Zeroが抜群のサポートをかける。これはいい!!

滑らかさと歯切れよさの同居する演奏はプリアンプの選択にも関与している。私が採用した Synergy 2i が見事に私の期待に応えてくれた。今はなき Coherence は現役時代にはプリアンプを苦手とする数社のパワーアンプに対して絶妙のコントロールを発揮してくれたものだが、このような剛性と柔軟性の両者を同時に求めたいときには得がたい脇役?(失礼) となっているのである。

この選択はヒットである!! ビンゴ!!

[10]アラゴネーズ 「これはパワーアンプの勝利だ!!」

最後に盛り上がるファランドールとは対照的に豪快なスタートから始まり、最終部は静かに消えていく編曲である。リズムカルな導入部から始まり、ここではオーボエのソロが“NEO”の中央に立ち上がり、それをフルートとピッコロ、クラリネットらの木管が取り囲むように展開していく。

そして、ここでもストリングスはピッチカートの余韻を響かせてステージを包み込む。この弦楽器がピッチカートから時折アルコに転ずる時の音色が何とも美しいことか!! そうです!!

私はこれを求めていたのだ。

[15]ハバネラ 「低域が引き締まっていると余韻感が引き立つ!!」

Synergy 2i のボリュームのカウンターはフルで 63.5 という数値になる。

刺激成分がなく爽快に聴き進むなかで、私はここぞというところで 58.0 までボリュームを上げた。

左右の弦楽器群の掛け合いでお馴染みの旋律が繰り返され、その中央ではタンバリンと木管にピンスポットを当てたようにくっきりと浮かび上がる。

この一瞬のために待ち構えていたオーケストラが一斉にフォルテを放ったときの爽快感!! そして、ここで見られることは中高域の余韻感誰しも気が付くところなのだが、低域のエコー感が鮮明に聴き取れるという驚きである。

“NEO”の低域のスピード感によって、その低い周波数帯域でのエコー感の分離と再現性に優れていることは先刻述べているものだが、逆に言えば低域の反応が遅いアンプでは本質がばれてしまうものだ。そして、情報量としての余韻感を伝えるべきケーブルがプアーであると同様にエコーは分離しない。この三者のコラボレートが私に新しい“NEO”の可能性を見せてくれたのである。

4. パワーアンプの貢献

私は今回のシステムをオーケストラの弦楽器の再現性を私の求めるレベルでということまで構成してきたのだが、またそこだけで終わるものではない。

押尾コータロー 『STARTING POINT』 6. Merry Christmas Mr. Lawrence
<http://www.toshiba-emi.co.jp/oshio/>

「おー!! 素晴らしい!! 合格~!!」

「Muse」からフィリッパ・ジョルダーノ 1. ハバネラ
http://www.universal-music.co.jp/classics/healing_menu.html

「文句なし、合格!!」

大貫妙子の“attraction” 5トラック「四季」
http://www.toshiba-emi.co.jp/onuki/disco/index_j.htm

「思わず涙!! 当然合格!!」

私の課題曲のどれをとってみても文句の付けようがない。弦楽器という連続する楽音、そして楽器の数が最も多いという編成の規模に対する解像度の必要性。これらを私が求めるレベルで再構成したシステムは見事に私の要求に答えてくれた。いや、おつりがくるくらいの素晴らしさなのだ。

これらの余韻感と質感の両立を果たしながら、うるわしい弦楽器を再現させるという仕事にはSTEALTHというケーブルの存在を私は色濃く感じていた。

しかし…、私にはプリアンプとパワーアンプの相性という確認事項をケーブルの更新ということも含めて解答を出したわけだが、その当初の目的にはTBP-Zeroの個体としての能力をチェックすることが実験の動機であったものだ。

そこで、私はこれまでのような弦楽器、声楽のように流れるような演奏の連続ではなく、ニュートラルなスピーカーであればあるほど問われるパルシブな応答性でパワーアンプのパフォーマンスを確認しようと考えたのである。

それには…、この曲がふさわしい。Audio labの「THE DIALOGUE」から
(1) WITH BASS を集中して聴くことにした。さて、どうなるか?
http://www.octavia.co.jp/shouhin/audio_lab.htm

Synergy 2i のボリュームは遂に 62.0 まで引き上げられてスタートした。

「おおー!! これは…!?!」

出だしのスネアのショットで面食らった。破碎音という例えではデリカシーにかけるかもしれないが、少なくとも弾性のあるドラムヘッドを叩くと言うよりは、無反発の打面をヒットするところなるのでは、というくらいに鋭い一打が叩きだされた。

続くキックドラムには以前にも増してハイスピードながら重量感が備わっている。この曲は他のスピーカーではキックの打音が床の上を這ってくるように周辺に拡散してしまうことが多いのだが、“NEO”の大きな特徴としてスピーカーの中ほどの高さにある中空に忽然とキックドラムが表れるものだ。

しかし、TBP-Zero によって駆動された“NEO”のウーファーは、それ自身が 600Hz までを受け持っているという比較的広い受け持ち帯域による負担をこともなげに解消してしまい、反応としては軽々と、そして質感としては圧縮されたエネルギーを一気に放射するように、目の前で手を叩くような切れ味の良さで連打続けるのである。もちろん息切れの兆候は微塵もない。

ウーファーの駆動は電流で、というスピーカー側から見た常識に対して、強力な電源部がその容量の大きさだけでなく給電スピードの速さによって破綻しない低域の打音の再生を行えることは私も体験済みだが、重量 20Kg という大型トランスが見せる反応としては私の記憶にもないくらいのテンションを再現する。これは見事だ!!

4パラ出力段のエミッター抵抗を取り去り、すべてのシグナルパスから保護リレーやチョークコイルなどの機械的接点をも取り去り、完全フルバランス構成 BTL という回路でノイズフロアの低減とハイパワーを両立させた。

もちろん保護回路はホール素子をシグナルパスの外部にセンサーとして設定し、入出力の波形観測を高速で行うことによりメイン電源のブレーカーを落とし、同時に出力段の電源コンデンサーを高速放電させるという新機構で万全の対策を施すという巧妙なテクニックで音質に影響のないプロテクションを実現している。

過去の経験から私の求めた音量ではパワーアンプの出力はピークで 600W を超えることも多々あり、ミニマム・インピーダンスは 150Hz で 4 オームという“NEO”での再生ではパワーアンプには過酷な条件であるはずだ。

前述しているが、通奏楽音のやわらかさ滑らかさを高い次元で実現しているものは真のハイスピードアンプといえるものだ。生半可なアンプでは解像度を落とした曖昧な表現で弦楽器を懐柔したようなファジーな音質でごまかしても、ドラムをハイパワーで鳴らすと刺激成分が混入してくるものなのだが、TBP-Zero ではリスナーにボリュームをもっと上げろと挑戦してくるような混濁のない打音の連続を軽々と展開する。聴きやすい打音であると自然とボリュームが上がってしまうが、スピーカーが No というまでは使い手の要求にこれでもかと応えてくれる制動感の素晴らしさがある。

TBP-Zero は外気温よりわずか 18 度高いだけという抜群の温度管理と効率の素晴らしさでこれらを実現したという。

「柔と剛の両立!! これは恐ろしいアンプが登場したものだ!!」

オーケストラの流麗な演奏と迫真のドラム、相反する演目に対する TBP-Zero の貢献度は今回の

システムで確実に証明された。私は興奮と感動で満腹状態になってしまったが、アンプに関して何らかの食い足りないという欲求不満をお持ちの方にこそ、ぜひ TBP-Zero の試食をお勧めするものである。

NEO の足跡

今では、私が初めて NEO を聴いてから 14 ヶ月、その間に幾多のコンポーネントで NEO を聴いてきたことか…。

最初は HALCRO dm8 と dm68 がアンプでのペアリングで先陣を切り、フロントエンドはまだ ESOTERIC G-0s と P-0s+VUK-P0 であった。そして、dcs 974 と Elgar plus 1394 というシステムであったのだから、何と一年前の現在とでは隔日の感がある。当時はケーブルは発売になったばかりの ESOTERIC MEXCEL Cable で統一していたことも追記しておかなければならない。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/280.html>

その次には異色のペアリングとして Brumester Pre-Amp 808 MK5 と ESOTERIC A-70 というカップリングを検証し、他のコンポーネントとケーブルは前回通りとしてアンプの相互関係による音質変化を克明に表現するスピーカーとして更に私の信頼を深めたものだ。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/282.html>

さて、その次にはアンプを HALCRO dm8 と dm68 に戻し、CD システムをそのままとして何と ESOTERIC G-0s と Symmetricom's Cesium Frequency Standard 3 というマスタークロックの比較を鮮明に浮き彫りにするという芸当も成し遂げたものだった。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/283.html>

今度は前回と同じシステムで二通りのマスタークロックを使用しながら、何と J-1Project PPR-100 をフロントエンドのコンポーネントに使用して電源環境の変化を聴き取るという検証に大活躍してくれたものだった。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/286.html>

NEO の輸入元では私のレビューを英訳して MOSQUITO の皆さんにレポートを送るというエピソードも生まれた。しかし、後日判明したところでは私の技術的な解説は CONEX JAPAN 株式会社の社長 Eric CHARLERY 氏には難しくて英訳が出来ず、一部内容が抜け落ちていた。
(^_^)

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/289.html>

NEO を使ってのアンプの検証は何も輸入品ばかりではない。TECHNICAL BRAIN Monaural Power Amplifier TBP-Zero と新進気鋭の高級ケーブルメーカー STEALTH も NEO が見事に検証してくれたのである。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/290.html>

アンプを HALCRO dm8 と dm68 に戻しケーブルを STEALTH に変更して新境地を開きながら成長する NEO は、ハードウェアだけでなく海外の貴重なディスクも紹介することになった。これは楽しめました!!

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/291.html>

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/292.html>

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/294.html>

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/296.html>

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/297.html>

NEO のユニークな内部構造が明らかになり、更に演奏の音質に説得力が感じられるようになったエピソードも紹介していた。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/298.html>

2004. 6. 7-No. 0933-で配信し、web では未公開の情報として SONY SCD-DR1 の試聴も NEO で行っています。国産の新製品のテストにも欠かせない存在となってきました。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/302.html>

そして、H. A. L. のリファレンスケーブルの座を長らく務めてきた PAD DOMINUS に対して世代交代を告げる YEMANJA の登場にも立ち会ってきました。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/305.html>

ESOTERIC 8N Cu パワーケーブルという画期的な限定生産の電源ケーブルの誕生。それを取り上げたのも NEO でした。そうそう、この時には CD システムには ESOTERIC X-01 を使用しています。理由は下記で述べております。(^^)

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/307.html>

SONY SCD-DR1 に ESOTERIC G-0s と Symmetricom's Cesium Frequency Standard 3 というマスタークロック・ジェネレーターを接続し、他では真似の出来ないレベルで国産コンポーネントの評価にも NEO は貢献してきました。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/309.html>

電源ケーブル ESOTERIC 8N-PC8100 をすべてのコンポーネントに前面使用することでこんなに大きな影響力があったとは!? NEO が明らかにしてくれた驚きと発見でした。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/310.html>

UNIVERSAL PREAMPLIFIER MIMESIS 24ME が登場するが、その画期的な音質を何で私はチェックしたのか? GOLDMUND を主宰するミッシェル・レバションもここで NEO を聴き大変高く評価され、いわば公認となった NEO が GOLDMUND の新機軸を聴かせたのだ!

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/312.html>

やっとここで登場してきました(笑)ESOTERIC P-01 & D-01 の開発の音質評価にもリファレンスとして NEO が活躍しています。これほど多くのハイエンドオーディオの製品開発と評価に NEO が関わってきたという事実を MOSQUITO の皆さんが知ったらどう思われるでしょう。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/314.html>

H. A. L. のオリジナルとして NEO の存在がありますが、またそれは他社が H. A. L. のためにオリジナル商品を開発してくれる音質基準としても NEO が活躍しています。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/315.html>

このとき、初めて NEO はここから出て皆様の前に立ちました。イベントでも高い評価を得た NEO はステージでこのように演奏されたのです。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/318.html>

Stillpoints のアンプベース新製品。このような小物・アクセサリーの評価も NEO が活躍してくれました。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/320.html>

ESOTERIC X-03&UX-3 の最終段階の音質を検証したのも NEO でした。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/321.html>

新進気鋭のアンプメーカー、デンマークの VitusAudio の魅力を見事に開花させたのも NEO でした。このペアリングは私にとっての favorite です!! 素晴らしいです!!

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/322.html>

VitusAudio の SL-100 と SM-100 をそのままに、ケーブルをすべて PAD YEMANJA で統一するという世界初の試聴でも NEO が必要不可欠な存在となっていました。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/324.html>

GOLDMUND TELOS 600 が遂にやって来た!! この初登場でも NEO が当然リファレンスとなっています。なんと言ってもミッシェル・レバシヨンのお墨付きですから。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/328.html>

世界的なプロの現場でビッグメジャーとなっている Chord、その堂々たる新製品を吟味するのもやはり NEO でした。後日談として Chord 社の社長 John Franks 氏も NEO を聴いてショックを受けていました。これ本当の話ししです。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/329.html>

ここで NEO は新しい世界に飛躍します。ESOTERIC P-01 と D-01 を 4 台使用しての 4ch 再生という新境地に NEO は主役としてパフォーマンスを発揮しました。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/330.html>

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/331.html>

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/334.html>

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/335.html>

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/336.html>

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/337.html>

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/338.html>

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/339.html>

世界限定 50 台という GOLDMUND MULTIFORMAT PLAYER EIDOS REFERENCE (850 万円) の登場を祝福したのも NEO でした。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/332.html>

GOLDMUND のイメージを大きく変えた TELOS 600 を主軸とするシステムの検証にも NEO は貴重な音質基準となった。いや、逆に NEO の潜在能力が更に発見されたのだ!!

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/340.html>

その名は「 behold 」日本では未公開の新ブランドを迎え撃ったのも NEO でした!!

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/343.html>

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/346.html>

日本が誇る老舗ブランド LUX が 80 周年記念で開発した B-1000f も NEO が鳴らしました。このアンプは素晴らしい!!それを私に知らせてくれたのも NEO だったのです。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/344.html>

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/347.html>

世界中の数々のハイエンドマシンによって洗礼を受けた NEO は更に自ら進化します。ユーザー・デマンドに多用なマッチングを引き出す新たな NEO の可能性。それは私たちに更なる夢と魅力を提供してくれるでしょう!!

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/352.html>

そして、2005 年 6 月のこと、国内最速で H.A.L. が店頭公開した稀代の新製品、KRELEvolution One/Two がまたも NEO に新しい可能性の光を当てたのである!!

<http://www.dynamicaudio.jp/audio/5555/7f/event0506.html>

第五部「NEO TAIL の驚くべき音とは!!」

数々のエピソードを残しながら、Nautilus を意識して設計された NEO に対して私は更なる要求をしていた。

2005 年 4 月今回の MOSQUITO の方々の来日の目的には、そのサンプルを持参されてきたということもあったのだ。音楽ジャンルにこだわらず、使用する部屋の大きさの大小にも対応し、NEO が更に多くのユーザーに浸透していくための次世代チューニングを私は身をもって体験したのだった。

先ずはこれをご覧頂きたい。



不思議な形の金属の塊が二つあるが、一体これは何か?

私はこれを“NEO TAIL”と命名した。

下の NEO TAIL には先端が鋭いスパイクが二本差し込まれているのがお解かりだろうか?

NEO TAIL の床に対する面には深さの違う穴が三箇所空けられており、一番右の穴が最も深いのでスパイクの先端部しか見えておらず、真ん中の穴に入れた状態で写真のように半分程度露出してくる。

一番左の穴に入れるともっとスパイクが長く突き出すことになり、写真ではこの部分は穴が空いているだけの状態で何も差し込まれていないものだ。



この NEO TAIL を取り付けるとこのようになる。



この写真は右に見える状態が NEO TAIL の一番左の穴にスパイクを差し込んだ状態であり、左に映っている NEO TAIL は TAIL の先端に近い最も深い穴にスパイクを差し込んでセッティングしたところである。

このように NEO TAIL を装着することで NEO はヒップアップするのである。それを側面から見た状態が New technique-Elevation adjustment と題した真ん中の写真であり、NEO の仰角にこれだけの変化を付けることが出来るようになった。

従来は NEO の背中までアームのようにスタンドの一部が伸びていたが、その先端にはゴムが貼ってあるだけで NEO のカーボンのボディに触れているだけだったのだ。

つまり従来のスタンドを取り外しても NEO の背中にはビス穴のようなものは一切なく、スタンドを固定しているのはフロントバッフルに対して二本の太いビスだけであったのだ。私はてっきり NEO の背中にも穴が空いていてスタンドの先端もビスで固定しているのではと思っていたが、実際にはスタンドの支点は一箇所だけだったのだ。

昔懐かしいウルトラセブンの頭に付いている、ちょんまげのような形が「アイスラッガー」という飛び道具の武器になるものだが、それと同じようなデザインの従来のスタンドを取り去って NEO TAIL を取り付けると Refined design の写真のように大変すっきりとしたデザインになり、スタンド部の取り付け強度は以前と何ら変わらないのである。このスタイルは NEO のユニークなデザインをより洗練させるものであり、私は大変気に入った!!

私は NEO の音質を様々なシステムで検証し評価してきた中で、このスピーカーの特徴を理解し、より音質的な追求を行える可能性があるポイントとして指摘して制作を要望していたのが、この NEO TAIL なのである。

さあ、NEO が登場して一年目にして NEO は更に新しい魅力を振りまき始めた。

さて、NEO TAIL を装着することで NEO は三種類の表情を持つスピーカーとして生まれ変わった。それを分析するのに使用したシステムがこれだ。

-*-*-*- NEO TAIL 検証のためのリファレンスシステム -*-*-*-

GOLDMUND MULTIFORMAT PLAYER EIDOS REFERENCE 税別 ¥8,500,000.

<http://www.stellavox-japan.co.jp/products/goldmund/players.html>

↓

GOLDMUND LINEAL DIGITAL CABLE

↓

GOLDMUND MIMESIS 24ME 税別 ¥5,000,000.

<http://www.stellavox-japan.co.jp/products/goldmund/ultimate/mimesis24.html>

↓

GOLDMUND LINEAL DIGITAL CABLE

↓

GOLDMUND TELOS 600 税別 ¥5,100,000.

<http://www.goldmund.com/products/Telos600/>

↓

STEALTH Hybrid MLT Speaker Cable 5.0m H.A.L.'s Special Version

↓

MOSQUITO NEO + NEO TAIL 税別 ¥4,050,000.+アルファ

<http://www.mosquito-groupe.com/englishversion/base.html>

-*-*-*-*-*-*-*-*-*-

NEO TAIL の一番浅くフロントバッフルに近い穴にスパイクを差し込んだ場合には、ほぼ垂直に近い状態となり Elevation adjustment の写真の向こう側のセッティングとなる。この状態を便宜上の表現で“A”と表記する。

次に中間の穴にスパイクを差し込んだ状態は当然 Elevation adjustment の写真での中間の仰角となり“B”と表記し、最も深い穴でスパイクを使用して仰角が最も大きくなった状態が写真の手前側の状態であり、これを“C”と称することにする。

最初は 1987 年録音のマーラー交響曲第一番「巨人」小澤征爾/ボストン交響楽団で第二楽章で試してみることにした。余談だが、この曲を他のオーケストラではどうなるかに興味がわき、89年に録音されたベルリン・フィルハーモニーとクラウディオ・アバド指揮によるグラムフォンのディスクを求めて聴いたのだが、あまりの違いに啞然としてしまい、自分が持っていたマーラーのイメージとかけ離れすぎているので驚いてしまった。それに引き換え先日サントリーホールでヒュー・ウォルフ指揮によるフランクフルト放送交響楽団による同じマーラーの一番を聴いたのだが、この時の演奏は小澤征爾の解釈に大変近いものがあり感激してしまった。

もちろんクラシック音楽で交響曲には色々な解釈があつて当然でもあり、経験と知識の少ない私がとやかく言えるものではないのだが、アバドとベルリンフィルの録音では楽章の間

にテンポが変わったりするなど、どうも優雅であり華麗な印象が優先し、主題に対して軽く流れすぎるような演出に聴こえて仕方がなかった。生意気な発言をしてしまったようだが、色々な曲を聴いたきたなかで違いの大きさに驚いた一幕ということで述べさせて頂いた。

さて、NEO TAIL の調整は大変原始的であり、ふっくらした 70 キロある NEO のボディーを後ろから肩を入れるようにして持ち上げ、そのスキにスパイクの差し込み位置を変えるという単純な力仕事である。これを何十回と繰り返し同じ曲を同じボリュームで比較していくのである。

MIMESIS 24ME のボリュームは 80 として、最初に “B” を聴いた。
うん、やはりいい!!

次に “A” にしてみたら…!?

「おお!! オーケストラ全体との距離感が縮まったぞ!! 弦楽器が NEO の軸上に定位が移動してきた。その代わり木管楽器の音像が小ぶりになりシルエットが鮮明になった感じだ。トライアングルも輝きを増している。でも金管楽器の音像もトゥイーターの付近に集まってきてしまった。ステージ直前の最前列より五列目くらいの客席の雰囲気かな～。手前にステージがせり出してきたという表現でいいかもしれない。ホールエコーは減少してしまったが、その代わりに解像度が上がったということか。」

それでは、と今度は “C” にしてみると…!?

「ありゃ～、今度はオーケストラとの距離感が遠のいたぞ!! 弦楽器群は NEO のユニットがあるラインから外れて内側に移動し、音源のない空間から響いてくるという中間定位の浮遊感が素晴らしく、ホールエコーが同じ音源のはずが盛大に感じられる。しかし、反作用としては木管楽器の音像はちょっと大きくなり、金管楽器の輪郭は随分とソフトになった。スピーカーという音源が消えてしまったという錯覚を強烈に催すものであり、NEO が持っている遠近法の尺度を二倍にしたくらいに奥行き感が増加した。ティンパニーなどは、そんな表現がピッタリのように奥の方から響いてくるが、直接の打音よりも間接音の割合の方が多くなってしまったようだ。“A” との対比でかなり違う表情が楽しめるものであり、ホール録音では想像させる空間の大きさをかなり拡大してくれるということで、これは使い手の解釈によってはハマッテしまう人も多いだろう!!」

最初の課題曲でこれほどまでに変化を見せるので念のために “B” に戻した。

「私だったら、これかな～。

弦楽器は “A” ほどスピーカーの位置関係にはりつかず、木管・金管楽器の輪郭も望ましい大きさに整っていて好ましい。不思議なことに “C” よりも近いオーケストラでありながらホールエコーがよく空間に拡散し爽快である。音像の定位がスピーカーという音源から中空に外れて雰囲気をよく表しながらも楽音の鮮明さを維持し、私が欲しいそれらの条件を満たした上で余韻感間違いなく “A” を上回っている。これがいい!!」

NEO TAIL のアレンジでホール感の空間の大きさとオーケストラとの距離感が変わり、使いこなして大変大きな可能性をもたらしてくれた。リスニングルームの大きさにゆとりがない場合や NEO との距離がこの半分で 2 メートル程度の場合などは “C” のセッティングはクラシックファンにはたまらない妙味となるであろう。逆にライブな空間で部屋の残響時間が長

めという場合には“Ａ”におけるフォーカスの素晴らしさを推奨したい。もちろん、これらはオーナーの選択であるので、私と同じようにちょっぴり力仕事に精を出して頂きたいものです。しかし、コツを覚えてしまえば数秒間で変更できるのでご安心を。

さて次も定番となったディスクだ。http://www.kkv.no/kirkelig Kulturverksted
(シルケリグ・クルチュールヴェルクスタ)・Thirty Years' Fidelity
これは現在でも店頭にて販売しているので、ご来店の際にお申し付け下さい。

最初はこの曲だ。

7. Som en storm/Ole Paus/Oslo Kammerkor/Det begynner a blietliv.... (1998)

この曲は直前のオーケストラでの分析を元に“Ａ”から聴き始めました。

そして“Ｃ”にしてみたら…!?

「おー!! バックコーラスが空間に溶け込んでいるぞ!! この曲は冒頭に教会の聖歌隊を思わせるバックコーラスが入っているのだが、そのコーラスが NEO の音源という位置関係を完全に消し去るように、Nautilus も真っ青というくらいに見事に空気中に浮かび、そして余韻をスピーカーの周辺の空気に溶け込ませてしまうのである。これは“Ａ”との比較で極めて大きな違いであった。それにつられて、ということなのだろうか Ole Paus の Voice の色彩感は少し淡く薄くなっている。同時にウッドベースの輪郭も少し希薄になり、ギターのカットも薄口になっている。楽音の濃淡表現を薄くしていく傾向があるのだが、スピーカーの存在感を前例のないほど消し去ってくれる効果とどちらを選択するか、という悩みはオーナーにとって楽しみともなるはずである。まるでカメレオンの保護色のように楽音をスピーカー周辺の空気に溶け込ませてしまう変化は確かに私を魅了した。」

さて、今度は“Ｂ”にして再度スタートしたら…!?

「予想的中!! Ole Paus の Voice の輪郭が鮮明になってきたぞ!! コーラスの余韻の広がり方は“Ｃ”よりもスケールは小さくなるが、歌手の口元が見えてくるような解像度の向上があり、音像が鮮明になるのでエコー感とのセパレーションも認識しやすくなった。ギターのカットは“Ｃ”よりも弾けているし、ウッドベースの色合いも“Ｃ”より濃くなってきた。バリトンの低い Voice の息づかいの低い周波数の部分やウッドベースの変化を見ていると、仰角が垂直に近づくにつれて鮮明になってくるようだ。これを確認しなくては!!」

次第に変化の推測が出来るようになってきたので確認のために再度“Ａ”に戻した。

「あー、やっぱりそうだ!! この状態が Ole Paus の Voice の口元を最も鮮明にしている。そして“Ｂ”や“Ｃ”では声のエコー感が周辺に拡散していたのに対して、今はずっと音像の位置が上に持ち上がったようにしてすっきりしている。声の質感はこれが一番いいかも! ギターの切れもいいが、その音像は NEO の軸上、つまり音源の位置付近に定着してしまうようだ。ウッドベースの輪郭もやはりこれが一番くっきりしている。“Ａ”のセッティングでは低域に向かうほど、つまり再生する楽音の周波数が低くなればなるほど、その輪郭表現を鮮明にしていくことがわかった。これはスタジオ録音のポップスなどを楽しみたいときには素晴らし

い調味料になるセッティングの変化だろう。しかし、演奏全体の奥行き感は“C”ほどには深くならない。顕著な例えがバックコーラスの歌手は五歩手前に全員が歩み寄ってきたような音場感の縮小がある。だからこそ解像度が良くなったということもあるのだが、聴き方によってはホール録音とスタジオ録音で見事に使い分けが出来るので楽しさ倍増というものだ。」

-*-*-*-*-*-*-*-*-

これは面白くなってきたぞ!! では次だ!!

10 Mitt hjerte alltid vanker/Rim Banna/Skruk/Krybberom (2003)

http://www.kkv.no/musikk_klubb/tekster/285_fidelity.htm

次第に作業に慣れてくると五秒程度でセッティングを変えられるようになってきた。

7. Som en storm では冒頭と最後にコーラスがあり演奏の中心は NEO のセンターにポッカーリ浮かぶ Ole Paus の Voice だったが、今度の曲はまったく逆で最初に女性ヴォーカリスト RIM BANNA のソロが冒頭にあり、それ以後はずっとコーラスが続くというものだ。つまり、スピーカーのセンターにくっきりと浮かんで欲しいソロと、スピーカーの周辺と奥行き方向に広大に広がって欲しいバックコーラスのウェイトが逆転している曲なのである。

これも先ほどと同じように、まず“A”から聴き始めた。これまでの分析からソロヴォーカルがもっともくっきりと再現されるセッティングであり、他のスピーカーに比べれば大変素晴らしい音場感を持っている NEO にして、それを控えめにして楽音の解像度を印象付けるチューニングと言える。

最も変化量の多い“C”にしてみたら…!?

「おー!! この浮遊感というか空気に溶け込んでいくソロヴォーカルは凄い!!コーラスはどうだ?? おー!! 霧散するという表現がピッタリの余韻の消え方だ。霧吹きを手を持って頭上で空に向かってスプレーした霧は、日差しの中で瞬く間に蒸発したものか自分の顔に降りかかってくることなく消えていくように、コーラスのエコー感も NEO の後方へ広がりながら空気に浸透していくようだ。スピーカーが消えるというフレーズは Nautilus で散々使い古した言葉となってしまったが、他の引用を思い出すことが出来ない自分が情けない。しかし、同じ NEO がなぜこれほどまでに再生音が漂っていく空域を拡大してしまうのか!!」

“B”に切り替える時間が惜しいほどに好奇心が高まっていくが…!?

「あっ、この RIM BANNA のソロでは口元が見えてきたぞ!!この第一印象はコーラスでも引き継がれ、合唱団の一人一人の立っている場所が認識された上でのエコー感の豊かさが感じられるようになった。言い換えればソロヴォーカルと同じように、声という楽音の発生点がそこにあるとわからせながら広大な音場感を同時に聴かせるのである。それはピアノの音が空間を転がっていくような質感にも表れていて、“C”よりもピアノの一音ずつに个体感が感じられる。つまり打音の瞬間が鮮明になっているということだ。“A”までいかないが楽音の核を思わせる音色の中心部分が濃厚になることで、“C”の魅力との駆け引きになるだろう。これは難しい。」

コーラス中心の 10 Mitt hjerte alltid vanker では、“C”の浮遊感ばかりが優先されると

歯がゆくなってしまふところもあるが、余韻感の広がる空間の領域を狭める“A”までいかず、まことに“B”のセッティングが旨みを残して解像度を維持してくれることがわかった!!
しかし、コーラスという楽音の性格を考慮しての分析であり、センターに定位する楽音の鮮明さを重視するのか、NEOの背景に広大に広がる余韻感を楽しむのか、という選択は実に贅沢な悩みとなってしまった。

-*-*-*-*-*-*-*-*-

NEO TAILでの三種類の音質変化は実に多くの発見と感動をもたらしてくれた。オーケストラにおけるホールエコーと弦楽器群との関連、木管・金管楽器の両方で起こる音像変化の振る舞い。教会で録音されたコーラスとシンプルなバックの演奏がアコースティックな空間でのミックスを操ってしまうNEO TAILの物凄さ!! これまでは演奏空間において存在していた余韻感の保存性と再生時の拡大と縮小ということに着目してきたが、最後は超がつくほどはつきりくつきりのスタジオ録音での検証だ。

私が数瞬悩んで選んだ曲がこれだ。こんな古いディスクもここにはたくさんある。

<http://home.t03.itscom.net/chotaro/src-msc/Disco/D014.htm>

Donald Fagen Trans-Island Skywayである。当時のディスクナンバーはWPCP5373だが、もうとっくに廃盤になっているEP盤CDでリンクがなかったのだが、上記はバッチリとヒットしたのでリンクフリーということだったので紹介させて頂いた。ありがとうございました。

スタジオ録音でも様々に音場感をイメージさせるものがあるのだが、私がこのディスクを選び出したのにも理由がある。2トラックめの「Trans Island Skyway」と3トラックめの「Snowbound」では「Bass, Drums, Vocal Only」と記されているように目が覚めるように炸裂するドラムと、非常に低重心で切れのいいエレキベース、そしてDonald Fagenのソロヴォーカルとオーバーダビングして左右チャンネルに分かれた彼自身によるバックコーラスというシンプルでありながらリヴァーブをかけていない鮮明な音像として録音されているからだ。つまりは飾り気のないスタジオでの楽器そのものの演奏ということになるだろう。さあ、今までとまったく違う超クリアなスタジオ録音ではいかなる発見があることか!?

とにかく音像が鮮明なこの曲を最初は中間の“B”から聴き、これを基準にした。

三回ほど聴き続けてしっかりと記憶に焼き付けてから“C”に変更したら…!?

「あら～、これはいかん!! 最初の五秒間を聴いただけで直ちに結論が出てしまった。エレキベースの質感は軽く浮き上がり音像は大きくなり、キックドラムも同様にふっくらと打音が聴こえる面積を拡大してしまっている。つまり、しまりが無い。シンバルの音も透明感を損なうのか、ちょっと荒れ気味になり鋭くヒットするタムの打音もにじみがあるようだ。ヴォーカルは口元が大きくなってしまい、いいところなし。こんなにはっきり違いがわかるなんて予想以上だ。アコースティックな響きという情緒的な要素が個人の好みを反映する選択は人によって“A”“B”“C”と選択が分かれることも理解できるのだが、この曲のように鮮明さが勝負という音楽だと“C”の支持者はいないだろうな～。それほどはっきりと違いが出てしまう。」

もう何回目になるのか忘れてしまったが、それでは…と“A”に切り替えた。

「おー!! これだよこれ!! こんなにタイトに引き締まったエレキベースは今までのNEOで

最高だ!! いや、このテンションと重量感が両立して個体感のある低域の再現性というのはこのフロアーにあるスピーカーの中でも最高だろう!! これは凄い!!

おー!! キックドラムの打音の音像がこんなにコンパクトになってる!! しかも、立ち上がりのインパクトも鋭く、またブレーキがきっちり効いて打音の立ち消え方も引き締まっている。それに音像が集約されるのでエネルギー感と重みが加わっているではないか!!

来たー!! このタムのヒットしたときの炸裂するスピード感は一切なんなんだ!! 耳のすぐ近くで両手を打ち鳴らしたように爆裂するかのごとくのインパクト。叩く音にエコー感をつけないと瞬発力の鋭さが身に、いや耳に沁みる!!そしてシンバルの音色も不思議なことに透き通るように輝き、にじみや濁りはまったく感じられなくなってしまった。これは不思議だ!!

そして、ヴォーカルは以前よりも定位感をちょっぴり NEO のトゥイーターレベルに高くなって表れ、そのフォーカス感の何ともジャストなこと!! 音像の輪郭がエコーをかけない分だけ鮮明に感じられ、左右のバックコーラスもセンターのヴォーカルの同じクォリティーで NEO の軸上で歌っている。こんな NEO はもしかしたら始めてかもしれないぞ!! 」

あまりの変化の大きさに我を忘れて曲の最後まで聴いてしまった!!
いや、疑り深い私は再度 “B” に戻してみると…!?

「あれ〜、最初に聴いた時には感じなかったのに、いったん “A” を聴いてしまったら、もう戻れないや!! さっきは平然と聴いていたが “A” と比較すると、ちょうど “B” の後で “C” を聴いて、テンションがたるんでしまって失望したときと同じことを “B” にも感じてしまう。 “B” でさえも音像のフォーカスが甘く感じられ輪郭が薄くなり、低域も軽くなってしまうように思われる。とにかく “A” が凄すぎるんだ!! 」

これまでのホールや教会での録音による空間の大きさをイメージさせる楽音とは違って、眼前で直接的に観察できる鮮明なスタジオ録音については議論の余地はない程に “A” の圧勝である。これ以外は認められない程にギャップは大きい!!

アコースティックに余韻を長く滞空させる音楽では情緒的に “B” や “C” を選択し、そこに楽しみも見出すことが出来るだろうが、楽音と音像の精密なディティールを目視によって誰もが共通の選択をしてしまうのがこのような音楽なのだろう。この比較試聴を 10 人のユーザーに行ったとしたら、間違いなく支持率 100%で “A” が選ばれるに違いない。職業的なカンというよりも、もっと単純で誰にでもわかる NEO の新しい使い方、いや魅力が発見されたのだ!! これは以前の NEO とも違う。

NEO TAIL によって新しい NEO が誕生したということだ!!

~*~*~*~*~*~*~*~*~*

数時間に渡りテストしてきた NEO TAIL による三つの表情をまとめてみると次のように表すことが出来る。色々な楽音でのパラメーターを一言ずつ整理してみた。

- ・オーケストラ(ステージ)との距離感が大きい順 “C” “B” “A”
- ・弦楽器群の定位感が NEO 本体から遊離して中間に浮かぶ順 “C” “B” “A”

・ヴァイオリンの質感に柔軟性を感じる順	“C”	“B”	“A”
・木管楽器の音像が小さく引き締まる順	“A”	“B”	“C”
・金管楽器の奥行き感が大きい順	“C”	“B”	“A”
・ホールでの打楽器の残響成分の含み方が多い順	“C”	“B”	“A”
・オーケストラ各パートの分離感が良い順	“A”	“B”	“C”
・センター定位の声の輪郭が鮮明な順	“A”	“B”	“C”
・コーラスのような連続楽音の音場感が広い順	“C”	“B”	“A”
・残響のある環境で録音された打楽器の解像度が良い順	“B”	“A”	“C”
・余韻感を伴う演奏で解像度とエコー感のバランスの良い順	“B”	“A”	“C”
・ギターの定位感が NEO 本体から遊離して中間に浮かぶ順	“C”	“B”	“A”
・スタジオ録音の低音楽器の鮮明さと解像度が良い順	“A”	“B”	“C”
・スタジオ録音の低音楽器の个体感と重量感が良い順	“A”	“B”	“C”
・スタジオ録音の打楽器の鮮明さと解像度が良い順	“A”	“B”	“C”
・スタジオ録音のヴォーカルの鮮明さと解像度が良い順	“A”	“B”	“C”

~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*

左から順に良い評価を並べてみたものだが、言葉とは裏腹なもので反対語の表現では順番は逆になるが、そこに使い手が望む感性を引用して利用して頂ければと思う。例えば…!?

- ・ヴァイオリンの質感に柔軟性を感じる順
- ・木管楽器の音像が小さく引き締まる順

この二つは対照的なのだが、使い手が求める感性、言い換えればどのような楽曲を好み、それをどのような雰囲気と質感で鳴らしたいのか、という選択肢がここにあるということだ。

しかも、それは NEO という忠実な再現性を持つスピーカーとしてのクォリティーを私が保証した上での選択であり、極端な失敗はないという安心感を強調したい。ひとつひとつ私がここで検証したものなので間違いはない!!

~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*

私が提示したアイデアから更なる可能性が出現したのだが、本日現在では NEO TAIL のプラ

イスは決定していない。オプションとして発売する予定だが、今後の生産計画では標準装備となる可能性もあるかもしれない。しかし、その時には日本仕様として他国のセールスでは NEO TAIL は標準化しないように交渉するつもりだ。

私と H. A. L. があるからこそ NEO のテイクオフが出来たのだとしたら、それを理解し支援して下さった皆様にとっても、日本仕様の NEO を購入できるというアドヴァンテージはハルズサークルの皆様提供したいからである。事実、NEO のオーナーの皆様はすべてハルズサークル会員なのだから。

現在の NEO を鳴らしているリファレンスシステムは 4/15 に MOSQUITO の皆さんが試聴された下記のシステムである。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/340.html>

つまり、これは前号で紹介した「Go to Full Digital Nautilus」と同じ構成であるということが、NEO と Nautilus が異母兄弟であるという証なのである!!

今年の夏は Nautilus オーナーにとっても、そして NEO を目指している皆様にとっても、GOLDMUND でドライブすることで更にヒートアップすることだろう!!

Nautilus のセールスが完了した今、私になぜ NEO を推奨するのか!?

それは言葉ではなく、ここで NEO を聴かれることによってご理解頂けるでしょう!!

第六部 「"NEO"のプライスの本当のところをお知らせ致します!!」

2004. 6. 4 配信の No. 0930 にて紹介いたしました“NEO” H. A. L.’s Hearing Report の中で、投稿して頂いた H 様が次のように述べていらっしゃいました。

「しかも現地価格は 12,900 ユーロ / 1 本とホームページに出ているではありませんか。ユーロ高ですからねえ、現地価格を 1 ユーロ 140 円設定でもペアで 360 万円。」

この計算に早速輸入元の社長からチェックが入りました(^_^)

<http://www.mosquito-groupe.com/englishversion/base.html>

確かに web には 12,900 ユーロとありますが…、よくよく読みますと…!?

Retailed price : from 12,900E per unit depending on finish

とありまして、要は仕上げによって 12,900 ユーロからあります、ということらしいのです。そして、私も始めて知りましたが、実は NEO には弟分がいたのです!!

Neo Laque 仕上げというモデルがあり、前面は同じですが独特の曲線でデザインされた本体がラッカー塗装仕上げのモデルがあるということです。しかし、その仕上げが今ひとつ高級感がないということで、これまでご紹介してきたカーボン仕様が日本で輸入することになったものでした。このラッカー仕上げが一台 12,900 ユーロなのです。

従って、Neo Carbon は現地フランスでの価格はセットで 29,000. ユーロとなっており、これを 140 円で計算すると¥4,060,000. となります。

私も、どうして税別定価が 405 万円という半端な価格なんだろうと思っていましたが、オーディオ専門の輸入元ではないということもあり単純に地元フランスと同じプライスを付けたということだったのです!!

しかし、私は既に税込みで 400 万円ちょうどという販売価格を公表してしまいましたので…、ちよっぴり後悔してます～。^_^; フランスと同じように税別 406 万円に近い価格で販売しても問題はなかったわけですから…!?

と、ということでカーボン・フィニッシュの NEO の正確な現地価格を念のために皆様にお知らせしました。こちらの方がお安いですよ～皆様のご注文お待ちしております～<m()m>

エピローグ

現在は 2005 年 7 月になろうとする時期、これまでのエピソードと感動体験を過去のメールマガジンの配信より抜粋し再編集の上加筆したものであり、語調が時折変化しているところがあり読みにくいところはお詫び申し上げます。

ただ、そろそろ 30 年になろうとする私の職歴の中でも、異彩を放つ製品というのは数少ないものであり、更にスピーカーという分野ではメーカーの栄枯盛衰も激しく生き残ることが難しい世界でもある。それは大きく資本を投下して設立したメーカーであっても音質で説得力がなければ長続きせず、またまったく無名であっても実演を体験されたお客様に認められれば継続的なセールスは可能であるということになる。

今回の NEO のストーリーで最後に私が強調したいことは、この製品こそ 100%試聴によって選ばれ、感動という体験を根拠にしてユーザーから支持され販売されてきたという事実である。大金をかけたセールスプロモーションを展開するメーカーも、私はその存在を否定したりすることはない。しかし、実際の試聴によって納得の上で購入しなければユーザーの満足感というのはどれほどのものになるのだろうか。

今回の随筆はひとつの区切りとして過去のエピソードを収録することが目的でもあるが、雑誌にはほとんど紹介されない NEO のためのカタログとしての意味合いを込めて編集したものである。これをご一読頂くことで NEO の魅力と価値観が、ここで試聴された後のお客様の胸中に湧き上がってくれば何よりである。そして、逆にこれを先に読まれた皆様へは、ここ東京において実際の NEO を試聴して頂きたいという願いも込められている。

冒頭に述べているように大変珍しいケースのハイエンドオーディオのマーケティングが成功するかどうか、私と NEO の挑戦これからも続いていくことだろう。後は日本のオーディオファンの皆様の行動力に期待するのみである。

ご精読ありがとうございました。

[完]

2005 年 7 月吉日 Dynamic audio 5555 店長 川又利明